岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 96

大田茶屋遺跡 1

県道津山加茂線
建設に伴う発掘調査

1994

岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 96

大田茶屋遺跡 1

県道津山加茂線
建設に伴う発掘調査

1994

岡山県教育委員会

序

津山市は、古代に美作国府が設置されて以来、岡山県北部の中心都市として栄えてきました。最近は、国の地方拠点都市に指定され、より一層の発展が期待されています。県道津山加茂線は津山市街地から北へ発し、津山市一宮の盆地を通って加茂町に向かいます。一宮の盆地では大規模な土地区画整理事業がなされ、市が重点的に取り組む「津山市北の街」づくりが進行しています。また、盆地の東の丘陵には広大な岡山県酪農試験場の跡地が残されていましたが、ここについても、街づくり事業の一環として、芸術文化ゾーンと娯楽ゾーンを組み合わせた都市型リゾート拠点となる施設を整備する計画が発表され、県北活性化の起爆剤として期待されています。

これらの事業にとって重要となるのが県道津山加茂線の存在です。そこで、区画整理事業の用地内に県道を新設し、市街中心部と「北の街」を結ぶメインルートとして、また、リゾート施設へのアクセスルートとして整備・活用が図られることとなりました。新設される県道は酪農試験場跡地の南西端をかすめることとなりましたが、この地点に遺跡の所在することが事前の確認調査で明らかになりました。このため、やむをえぬ処置ではありましたが、記録保存のための発掘調査を実施しました。

調査の結果については本書に述べる通りですが、津山市では初めての縄文時代晩期の土壙や弥生時代と中世の集落、それに、江戸時代の墓地など、各時代にわたって、さまざまな遺構が検出されました。先人の足跡に思いをいたしつつ、本書が地域の歴史解明にいくらかでも役立ち、また、研究の資料として活用していただければ幸いです。

最後となりましたが、発掘調査にあたり有益なご助言をいただきました岡山県文化財保護審議会委員の先生方、調査の円滑な進行に協力をいただいた岡山県土木部道路建設課・企画部リゾート対策室の職員の方々、また、津山市教育委員会弥生の里文化財センターの職員諸氏、そしてなによりも、発掘調査に関係された地元の方々に厚くお礼申し上げます。

平成６年11月

岡山県教育委員会

教育長　森崎岩之助

例　言

1．本書は、主要県道津山加茂線の建設工事に伴い発掘調査を実施した、津山市大田小字茶屋に所在する大田茶屋（おおだちゃや）遺跡の概要報告書である。
2．発掘調査は、岡山県土木部道路建設課よりの分任事業として、岡山県教育委員会が担当し、実務については岡山県古代吉備文化財センターが実施した。
3．発掘調査は平成５年５月１日から12月６日まで実施し、調査面積は3557㎡である。
4．発掘調査の実施にあたっては、岡山県文化財保護審議会委員　近藤義郎氏・水内昌康氏に現地において指導・助言をいただいた。
5．墓１から検出された赤色顔料については、福岡市埋蔵文化財センター　本田光子・宮内庁正倉院事務所　成瀬正和の両氏に分析・鑑定を依頼した。鑑定結果については論文をいただき、付載として掲載している。
6．発掘調査は岡山県古代吉備文化財センター職員　岡本寛久・山本昌彦・瀧川明徳が担当した。
7．本書の作成ならびに執筆は岡本寛久が担当した。
8．出土遺物ならびに図面・写真類は岡山県古代吉備文化財センターにおいて保管している。

凡　例

1．本書第１図「周辺遺跡分布図」は建設省国土地理院発行の５万分の１地形図（津山東部）・（津山西部）を複製したものである。
2．本書の掲載図に用いた北はすべて真北である。
3．本書の掲載図の高度値は海抜高である。
4．発掘調査にあたっては、国土座標にしたがって10ｍ方眼を調査区に設定し、実測を行った。
5．第３章各項の遺構名称の後の（　）内は発掘調査時の名称を示す。
6．掲載図面の縮尺については、建物は100分の１、土壙は30分の１、土器は４分の１に統一している。
7．建物・柱穴列の方向の角度は30′刻みの概数である。

目　次

第１章　地理的・歴史的環境……1
第２章　調査の経緯……3
　第１節　調査に至る経過……3
　第２節　調査の経過……5
第３章　調査の結果……6
　第１節　遺跡の概要……6
　第２節　縄文時代の遺構・遺物……9
　第３節　弥生時代の遺構・遺物……12
　第４節　古代の遺構・遺物……19
　第５節　中世の遺構・遺物……21
　第６節　近世以降の遺構・遺物……29
付載　大田茶屋遺跡出土の赤色顔料について……34
報告書抄録……36

挿図目次

第１図　大田茶屋遺跡周辺遺跡分布図……1
第２図　調査区位置及び周辺地形図……3
第３図　測量用グリッド図……4
第４図　調査区内地山地質図……6
第５図　１区全遺構配置図……7
第６図　２区・３区全遺構配置図……8
第７図　縄文時代遺構配置図……9
第８図　土壙１……9
第９図　土壙１出土土器……9
第10図　土壙２……10
第11図　土壙２出土土器・石器……10
第12図　土壙３……10
第13図　土壙３出土土器……10
第14図　土壙３出土石器……11
第15図　弥生時代遺構配置図……12
第16図　住居１……13
第17図　住居１出土土器……13
第18図　住居２……14
第19図　住居２出土土器……14
第20図　住居３……15
第21図　住居３出土土器……15
第22図　建物１……15
第23図　建物２……16
第24図　建物３……16
第25図　建物４……16
第26図　建物５……16
第27図　建物６……17
第28図　建物７……17
第29図　建物８……17
第30図　土壙４……18
第31図　土壙５……18
第32図　墓１……18
第33図　１区出土土器……18
第34図　古代遺構配置図……19
第35図　柱穴列１全体図……19
第36図　柱穴列１各柱穴図……20
第37図　柱穴列２……20
第38図　柱穴１……20

第39図　中世遺構配置図……21
第40図　建物11……22
第41図　建物12……22
第42図　建物13……22
第43図　建物15……22
第44図　建物16……22
第45図　建物17……23
第46図　建物18……23
第47図　建物20……24
第48図　建物20出土土器……24
第49図　建物21……25
第50図　建物22……25
第51図　建物23……25
第52図　土壙６……26
第53図　土壙６出土土器……26
第54図　土壙７……26
第55図　土壙８……26
第56図　土壙９……26
第57図　土壙10……27
第58図　土壙11……27
第59図　土壙12……27
第60図　土壙13……27
第61図　土壙14……27
第62図　土壙15・16……28
第63図　溝３……28
第64図　溝４……28
第65図　近世以降遺構配置図……29
第66図　土壙17……30
第67図　土壙17出土土器……30
第68図　土壙25……30
第69図　土壙25出土土器……30
第70図　近世墓配置図……31
第71図　墓２……32
第72図　墓３・４……32
第73図　墓５……32
第74図　墓６……33
第75図　墓７……33
第76図　墓７出土磁器……33
第77図　墓８……33
第78図　墓９……33

図版目次

図版１　土壙２、土壙２完掘後、土壙３完掘後、土壙３
図版２　１区北西部全景、住居１
図版３　３区全景、住居２、住居２北西柱穴、住居３、住居３北西柱穴
図版４　１区北西部住居１・建物２～５、建物１、建物６・７、墓１
図版５　１区全景、建物15・16、建物17
図版６　２区西半部全景、建物18、建物20
図版７　建物21、建物22、建物23
図版８　柱穴列１・２、土壙19、柱穴列１、土壙20
図版９　溝５・６、土壙25
図版10　墓２、墓３・４、墓５、墓６・７、墓８、墓９
図版11　土壙１出土土器、土壙２出土土器・石器、土壙３出土土器・石器
図版12　土壙３出土石器、住居２・住居３・１区柱穴出土土器、土壙25・土壙17出土土器
図版13　墓２出土遺物、建物17出土釘、墓３・墓４出土遺物
図版14　墓３・４出土釘、墓５出土遺物、墓６出土釘
図版15　墓６出土遺物、墓８出土遺物
図版16　墓７出土遺物、墓７出土釘、墓９出土釘、墓９出土遺物・墓７出土磁器

第１章　地理的・歴史的環境

津山市街地は、吉井川と宮川の合流地点を中心に開けた、東西1.2km、南北3.8kmの盆地に展開する。盆地の東から北にかけては海抜120～160ｍ前後の低丘陵がなだらかなうねりをみせて広がり、幾筋もの舌状の尾根を派生している。盆地の西は海抜300ｍ程度の小高い丘陵地帯となり、盆地からの立ち上がりはやや急峻な斜面となる。大田茶屋遺跡は、盆地の北側の丘陵上にあり、派生した尾根筋の先端に位置する。遺跡の立地するあたりは、北東から南西に派生した尾根筋の先端が、盆地の西側の丘陵地帯とほとんど接するまでに近づき、その間を宮川が流れている。市街地の盆地はこの狭隘部を北限とするが、狭隘部を越えて宮川を遡ると一宮の小盆地に入る。この小盆地は中国山地の南裾に位置し、四周を丘陵に囲まれ、南北1.8km、東西1.2kmの広さをもっている。

吉井川は津山市街地の周辺でいくつかの中小河川と合流しているため、川沿いに平野部が連続していく。津山盆地と呼ばれるこの平野部の中心に位置しているのが津山市で、下流では加茂川、上流では香々美川・皿川によって形成された平野部と繋がっている。このため、津山市街地のある小盆地の密閉性は低く、水運なども考慮に入れれば、他地域に対しては開かれた空間といえる。加茂川沿いの道は鳥取県智頭町に至り、現在JR因美線が走る。吉井川本流は出雲街道として古くからの要路で、現在は国道179号線となっている。いずれも、山陰地方との密接な交流をうかがわせる。

津山市街地のある盆地周辺で、人間の活動の痕跡が明瞭になるのは縄文時代早期である。岡山県酪農試験場跡地内の埋蔵文化財確認調査において、早期の竪穴住居が１軒発掘され、床面から粗大楕円の押型文土器がつぶれたような形で出土した[1]。大田西奥田遺跡と呼称する。これに続く時代の遺跡はながらく途絶えることとなるが、縄文時代晩期に入り、一宮の盆地にある正善庵遺跡[2]から少量の土器片が出土し、ここで報告する大田茶屋遺跡の調査によって、同期の遺構・遺物が検出されることとなった。

弥生時代になると、宮川の流域では集落が点々と形成されるようになる。前期の遺跡としては一丁田遺跡[3]や京免遺跡[4]などがあり、前者は後期まで継続され、母集団の一つと考えられている。中期に入ると谷水田の開拓の進行と相まって、盆地東側の低丘陵上に、かつて「単位集団[5]」と捉えられた小住居群構造[6]からなる遺跡が次々と立地するようになり、中期後葉に至って爆発的な遺跡の増大をみることとなる。この頃の遺跡としては、沼遺跡[7]・沼Ｅ遺跡[8]・紫保井遺跡[9]などがある。後期に至って、宮川流域の低位部に大規模な環濠集落が形成される。京免遺跡[4]がそれで、環濠の外には木棺墓群を伴っていた。大田十二社遺跡[10]のような丘陵地の遺跡も後期に続いて存在していたが、環濠集落との格差は歴然で、弥生社会の中に不均等が生じていることを示している。後期の集団墓の遺跡としては、下道山遺跡[11]や権現山遺跡[12]があり、下道山遺跡と上原遺跡[13]からは特殊器台形土器が出土している。

古墳時代に入ると、津山では集落が途絶えるという傾向が顕著に認められるという[14]。集落の例はまだ無いが、宮川流域の古墳としては、全長46ｍの前方後円墳である上横野小丸山古墳[15]、帆立貝式の大野木塚古墳[16]、大形古墳と推定される十六夜山古墳[17]、方墳の下道山南古墳[11]などがある。

奈良時代になると、和銅６年（713）年に備前国の北６郡を割いて美作国が設けられ、これに伴って国府が宮川流域の盆地に造営されることとなる。美作国府跡[18]の発掘調査によって、政庁の主要建物と考えられる遺構が検出され、前身の苫田郡（評）衙に伴うとみられる遺構も出土している。

注

(1)岡本寛久「縄文時代早期の竪穴住居跡の発掘」『所報吉備』第15号 岡山県古代吉備文化財センター 1993年

(2)小郷利幸『正善庵遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第44集 津山市教育委員会 1992年

(3)植月壮介・近藤義郎「津山市山北一丁田遺跡」『津山弥生住居址群の研究－西地区－』津山郷土館考古学研究報告第２冊 津山市 1957年、岡田博「岡山県立津山工業高等学校プール建設に伴う山北一丁田関連遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財報告』13 岡山県教育委員会 1983年

(4)中山俊紀『京免・竹ノ下遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第11集 津山市教育委員会 1982年

(5)近藤義郎「共同体と単位集団」『考古学研究』第６巻第１号 考古学研究会 1959年

(6)中山俊紀「第４章 若干の考察－美作における弥生時代中期小住居群構造の解明にむけて－」『沼Ｅ遺跡Ⅱ』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第８集 津山市教育委員会 1981年

(7)近藤義郎・渋谷泰彦編『津山弥生住居址群の研究－西地区－』津山郷土館考古学研究報告第２冊 津山市 1957年

(8)中山俊紀・行田裕美『沼Ｅ遺跡Ⅱ』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第８集 津山市教育委員会 1981年

(9)中山俊紀「津山市紫保井遺跡と中期小住居群」『古代吉備』第15集 古代吉備研究会 1993年

(10)中山俊紀・河本清・安川豊史・行田裕美『大田十二社遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第10集 津山市教育委員会 1981年

(11)栗野克己・岡本寛久『下道山遺跡緊急発掘調査概報』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告17 岡山県教育委員会 1977年

(12)湊哲夫・春名啓介・安川豊史『図録 津山の史跡』津山市教育委員会 1978年

(13)近藤義郎「上原遺跡」『岡山県史』第18巻考古資料 岡山県 1986年

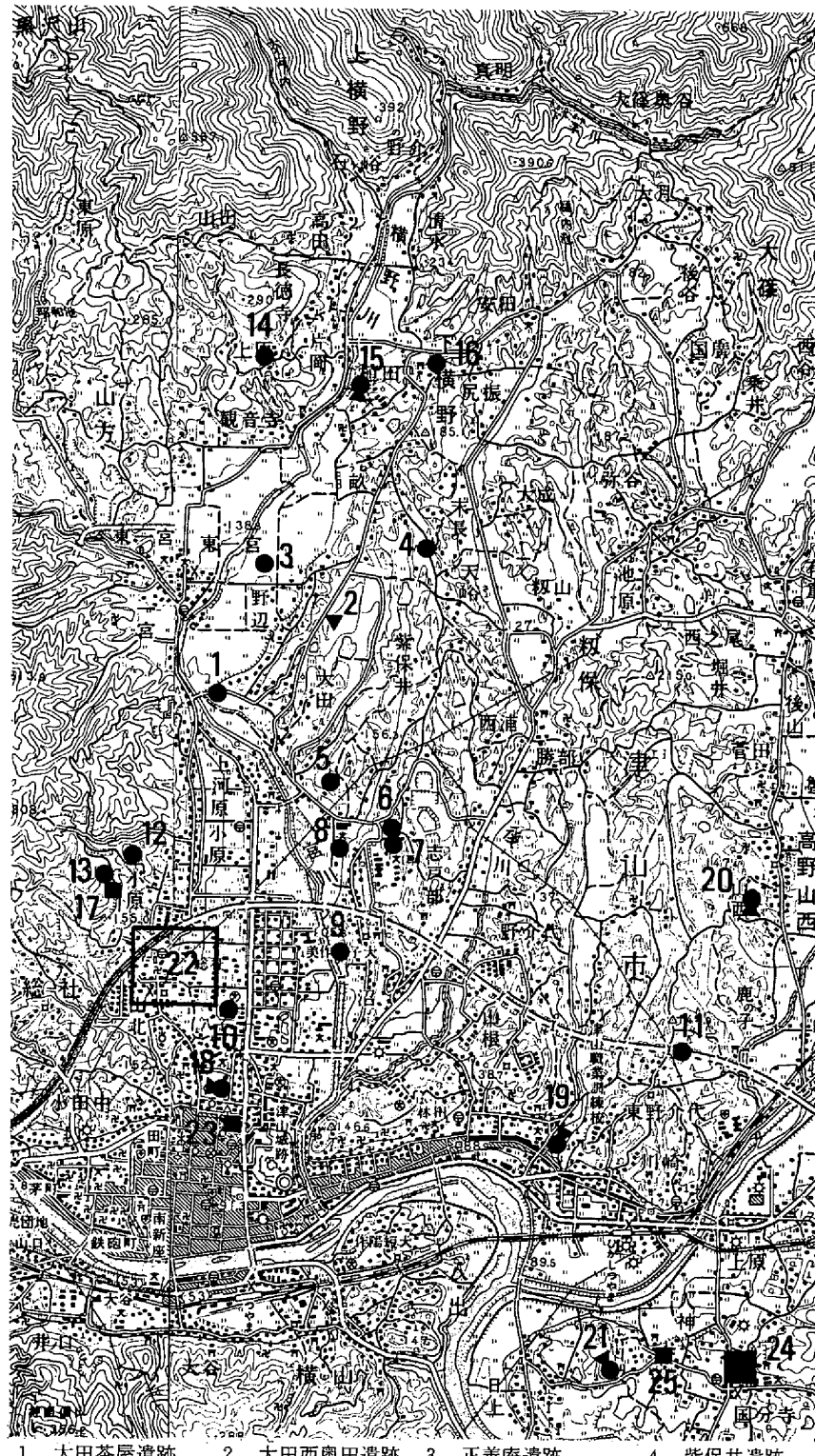
(14)河本清・中山俊紀「第５章 宮川流域における弥生社会の展開過程と大田十二社遺跡の位置」『大田十二社遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第10集 津山市教育委員会 1981年

(15)平岡正宏「上横野小丸山古墳発掘調査報告」『年報 津山弥生の里』第１号 津山弥生の里文化財センター 1994年

(16)今井堯「第１章 原始社会から古代国家の成立へ」『津山市史』第１巻原始・古代 津山市 1972年

(17)桑田俊明「[３] 十六夜山古墳ほか」『岡山県埋蔵文化財報告』24 岡山県教育委員会 1994年

(18)岡山県教育委員会「美作国府」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査３』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告６ 岡山県教育委員会 1973年、安川豊史『美作国府跡発掘調査報告－総社・小原線道路改良工事に伴う発掘調査－』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第15集 津山市教育委員会 1984年、安川豊史『美作国府跡発掘調査概報』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第40集 津山市教育委員会 1991年、安川豊史・白石純『美作国府跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第50集 津山市教育委員会 1994年



1．大田茶屋遺跡　2．大田西奥田遺跡　3．正善庵遺跡　4．紫保井遺跡
5．大田十二社遺跡　6．沼遺跡　7．沼Ｅ遺跡　8．京免遺跡
9．竹ノ下遺跡　10．一丁田遺跡　11．押入西遺跡　12．権現山遺跡
13．下道山遺跡　14．上原遺跡　15．上横野小丸山遺跡　16．大野木塚古墳
17．下道山南古墳　18．十六夜山古墳　19．玉淋大塚古墳　20．山西正仙塚古墳
21．日上天王山古墳　22．美作国府跡　23．椿高下遺跡　24．美作国分寺
25．美作国分尼寺

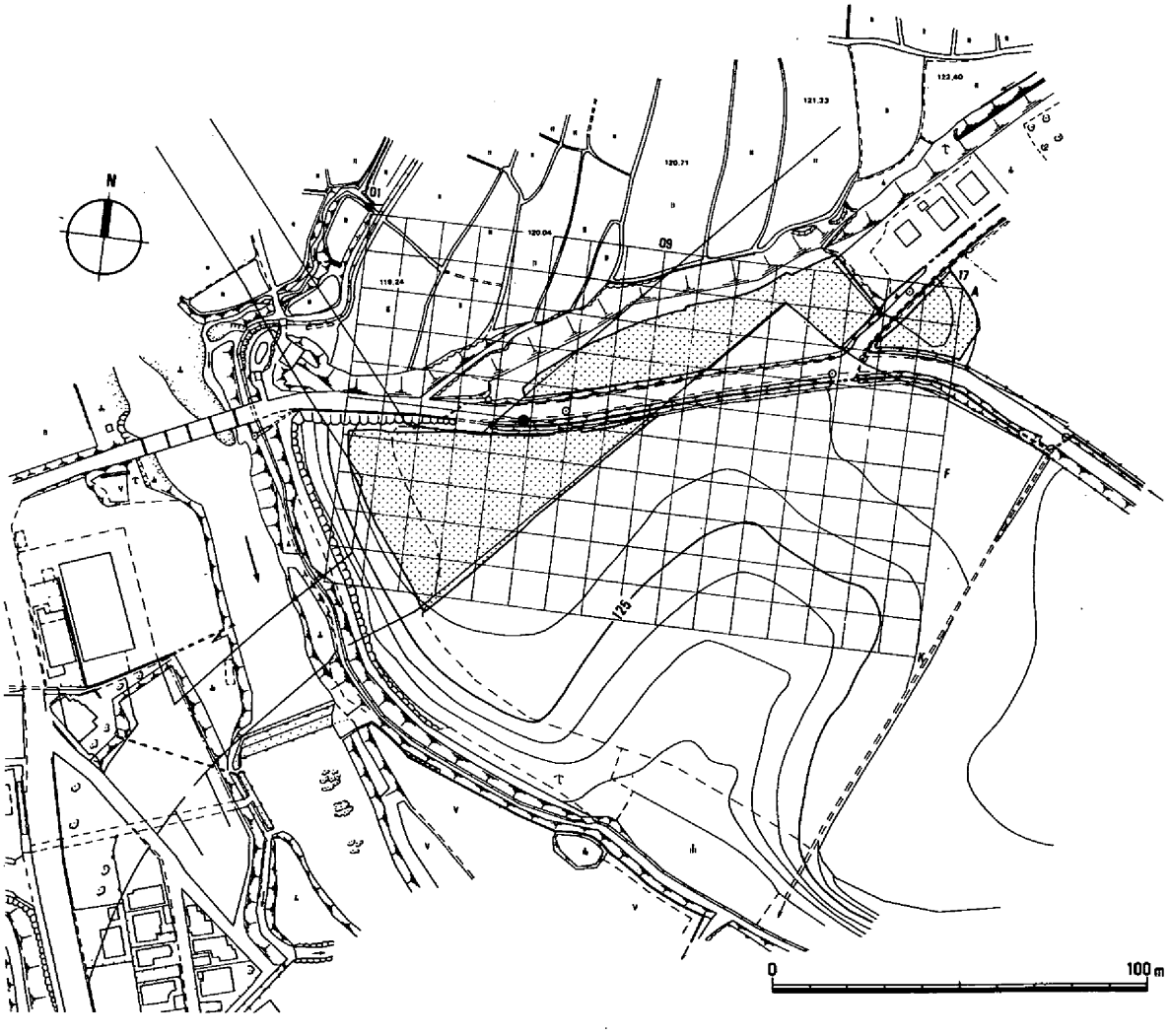
第１図　大田茶屋遺跡周辺遺跡分布図（Ｓ＝１/50000）

第２章　調査の経緯

第１節　調査に至る経過

県道津山加茂線は津山市街地に発し、北行して津山市上河原・一宮境の狭隘部から宮川の西岸に沿って延びる。やがて、宮川の上流にあたる横野川の谷伝いに遡り、加茂町に至る。宮川沿いの道路は蛇行して狭く、交通の難所となっている。宮川の東岸の東一宮地区において、大規模農道の南側の水田地帯を区画整理する事業計画が昭和62年度に具体化し、その計画の中に、県道津山加茂線の付け替え道路も含まれることとなった。また、津山市小原・上河原地区における県道の新設・拡幅工事も同時に進行し、今回の調査対象地となった酪農試験場の南西端に架かる農場橋の架け替え工事部分が取り残される形となった。

一方、岡山県津山酪農試験場も、行政改革の一環として実施された諸機関の統廃合に伴って、平成元年に旭町に新設された岡山県総合畜産センター（まきばの館）に吸収されることとなり、28.8haにのぼる広大な跡地が残されることとなった。この跡地の利用をめぐっては、岡山県や津山市の間で



第２図　調査区位置及び周辺地形図（Ｓ＝１/2000）

さまざまな議論がなされ、平成５年１月に県北の都市型リゾート拠点として整備する案が発表された。酪農試験場内では過去に弥生土器が採集されていて、周知の遺跡（酪農試験場地内遺跡）として全国遺跡地図にも掲載されていた。また、第１章でも述べたように、周辺の連続する丘陵端部には点々と遺跡の所在が確認されていた。このため、整備計画の実施にあたっては、酪農試験場跡地内の遺跡の詳細な分布状況を把握することが必要と判断された。このため、県教育委員会文化課と県企画部リゾート対策室との協議において、試験場跡地内全域で試掘溝（トレンチ）を発掘する遺跡確認調査を実施することとした。この調査は平成４年度末から５年度にかけて実施され、県道予定路線内においても丘陵の全域にわたって遺跡の存在が明瞭となった。このため、県土木部道路建設課との協議の結果、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

調査体制

岡山県教育委員会

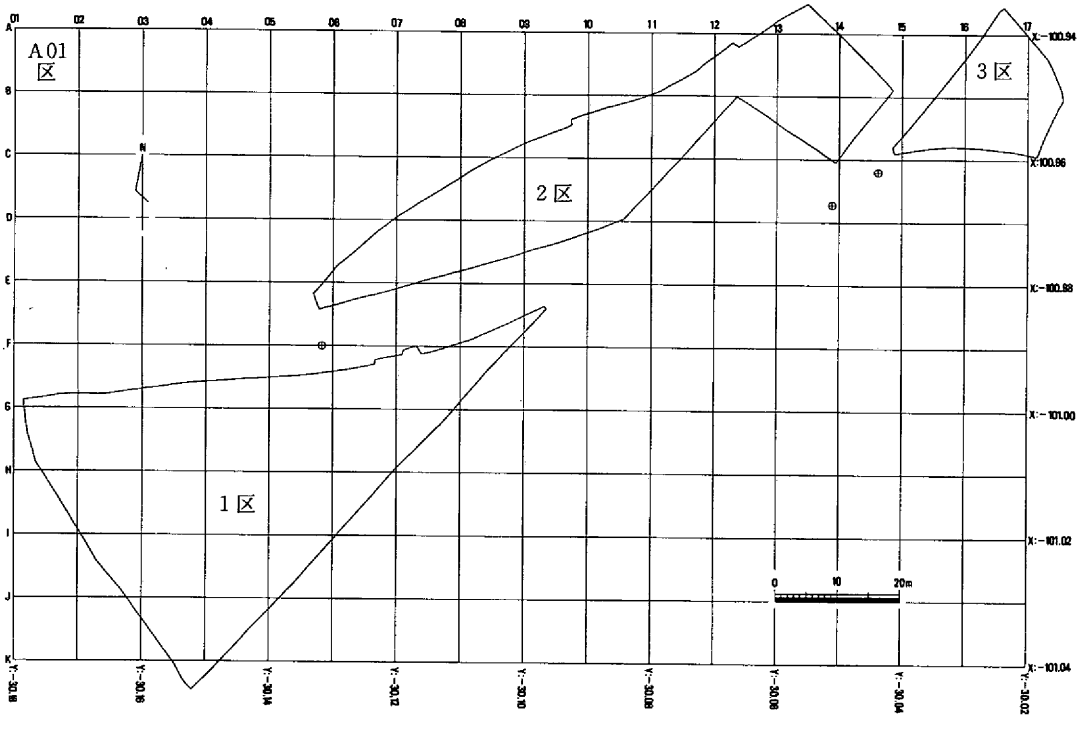
教育長	森崎岩之助		
教育次長	黒崎一秀	教育次長	岸本憲二

岡山県教育庁文化課

課長	渡辺淳平	課長代理	松井新一
課長補佐	高畑知功	主査	時長勇
文化財保護主事	亀山行雄		

岡山県古代吉備文化財センター

所長	横山常實	次長	葛原克人
総務課長	北原求	調査第一課長	正岡睦夫
総務課長補佐	小西親男	調査第一課長補佐	岡田博



第３図　測量用グリッド図（Ｓ＝１/1200）

主査	石井茂	文化財保護主査	岡本寛久（調査担当）
文化財保護主事	山本昌彦（調査担当）	主事	瀧川明徳（調査担当）

第２節　調査の経過

県道津山加茂線の建設に伴う発掘調査は、計画路線内に入る試験場跡地全域を対象として実施されることとなったが、既存の生活道路部分については当面除外し、丘陵の北側斜面についても人為的な崖面掘削による破壊が明瞭なため対象外とした。また、丘陵の南西斜面については、立木伐採等の問題もあったため、調査の進行過程で対象とするかどうかの判断を下すこととした。このような考えのもとに、第２図に点々で示した範囲について全面的な発掘を行った。調査の記録にあたっては、第３図に示すように、発掘地区を覆うように国土座標にしたがった10ｍ方眼を設定し、既存の道路によって分断された各地区を、丘陵の先端から１区・２区・３区と呼称することとした。

調査地区周辺は牧草地として利用されていたが、その造成にあたっては、丘陵頂部を削平し、その土で谷部を埋め立てたと思われる。確認調査のトレンチ観察によれば、丘陵頂部では厚さ30cm前後の造成土の下は黄褐色の粘土ないしは砂礫の基盤層がいきなり現れ、丘陵の斜面下方で旧表土の黒色粘質土（黒ボク）の残存が確認された。調査地区はほとんどが丘陵頂部にあたっていたため、重機を使用して造成土を除去し、基盤層の上面で遺構の検出作業を行った。２区では、谷頭が中央付近にかかっていたため旧表土が一部残存していたが、その上面での遺構の検出は困難なため、この部分についても旧表土のかなりを重機で除去した。なお、造成土や旧表土からの遺物の出土はほとんどみられなかった。

前述のように、遺構検出面はほぼ一面であったため、造成土除去後は３区から順次遺構検出作業を始め、検出した遺構については平行して掘り下げを行った。調査地区は最近の削平を受けていたためか、遺構の多くは柱穴か小規模な土壙で、また各時代の遺構が同一面から出土したため、その構成を復元することは難しかったが、調査時に建物と確認された柱穴については半割による断面観察を行い、土壙についても長軸方向での半割を実施した。丘陵の南西斜面については、調査の結果から判断して遺構の存在する可能性がないと考えられたため、発掘区の拡張は行わなかった。遺構の実測にあたっては、２区と３区では10ｍ方眼の中をさらに１ｍ方眼に細分し、定規を使用して記録を行い、１区では平板による記録を実施した。ただし、土壙については半割面にそって基準線を設定し、定規によって実測している。

発掘調査終了後は、岡山県古代吉備文化財センターにおいて図面・写真資料の整理と遺物の洗浄・復元・実測を実施し、報告書の作成作業を行った。

調査日誌抄

平成５年５月１日	３区より重機による表土剝ぎ開始。３区遺構検出作業開始。
５月24日	２区遺構検出作業開始。
６月25日	３区発掘調査終了。
７月26日	１区遺構検出作業開始。
８月１日	２区調査区拡張。
10月26日	２区発掘調査終了。
12月６日	１区発掘調査終了。

第３章　調査の結果

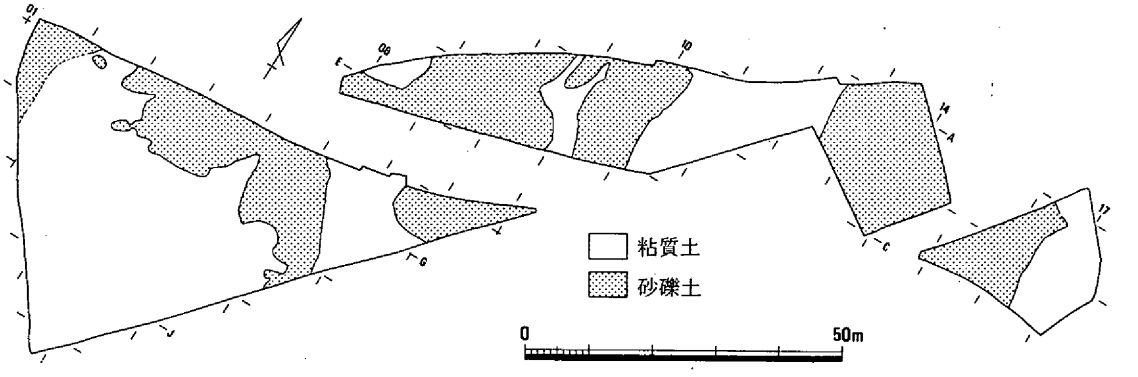
第１節　遺跡の概要

遺跡は舌状の丘陵先端部に位置しているが、今回発掘調査を実施したのは、その頂部平坦面の北半部分にあたる。この部分は、前述したように最近の削平による破壊を受けていて、牧草地の造成土を除去すると、ほとんどの部分で地山基盤層が露出した。基盤層は、第４図に示したように粘質土の部分と砂礫土の部分に分かれるが、粘質土は砂礫土のたわみ部分に堆積したものであり、すこし掘り下げると砂礫土が現れる。遺構の残存状況は削平によってあまり良好ではなかったが、それでも多くの柱穴や土壙を検出することができた。これらの遺構のほとんどは基盤層の粘質土部分に集中し、中世・近世の遺構がわずかに砂礫土を掘り込んで作られていた。

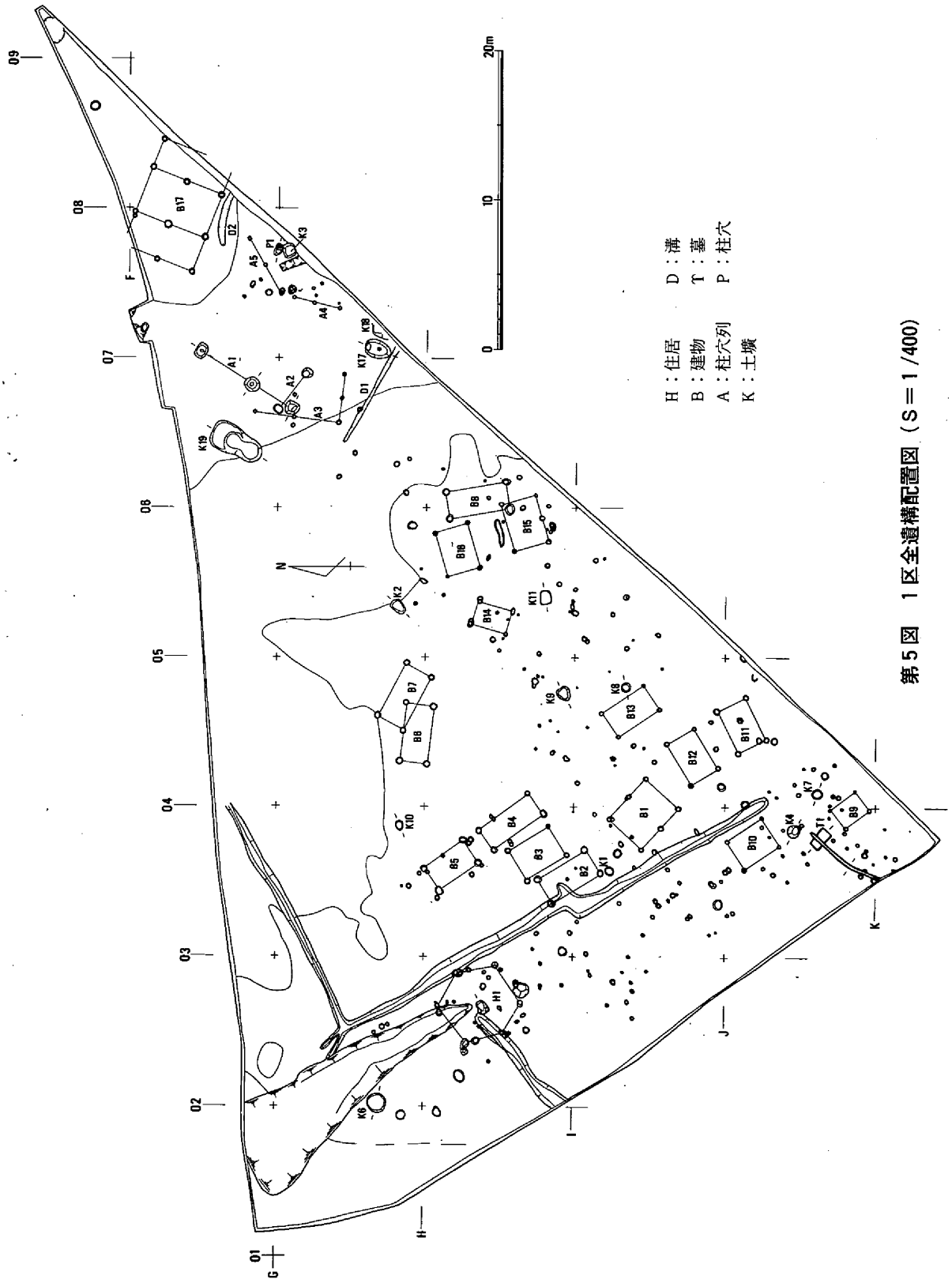
検出された遺構のほとんどが柱穴のために出土遺物が少なく、また、検出面が基盤層上面の一面だけであったため、遺構の年代比定は困難であった。遺構埋土の分類による検討も行ったが、明瞭な規則性は見いだせなかった。このために、形態的な類似に注意して年代比定を行い、遺構間の位置関係なども判断の材料とした。将来、隣接地での調査が予定されているため、その結果によっては年代比定に変化の生じる可能性も考えられる。遺構の年代は、縄文時代晩期、弥生時代中期・後期、古代、中世、近世以降と幅広く、複合遺跡の様相を示している。このうち、弥生時代と中世には集落が営まれていたとみられ、近世には屋敷地となっていたと考えられる。

各時代における遺構の分布状況をみるとかなり変化があり、それぞれの時代での遺跡の性格を表していると思われる。縄文時代の遺構は１区のみに認められ散在している。弥生時代の遺構は１区と３区にあり、１区では後期の、３区では中期の遺物を主として出土することから、集落の移動を考えさせる。古代の遺構は１区の一隅にあって孤立してる。中世の遺構は１～３区の全域に分布し、一つの村落を形成していたのではないかとさえ考えられる。近世以降の遺構は１区の北東端から２区の東端にあり、江戸時代には一つの屋敷が墓地を伴って存在していたと想定される。そして、周辺は酪農試験場が開設される以前まで農耕地として開墾されていたようで、用水路の痕跡とみられる溝や暗渠が検出されている。

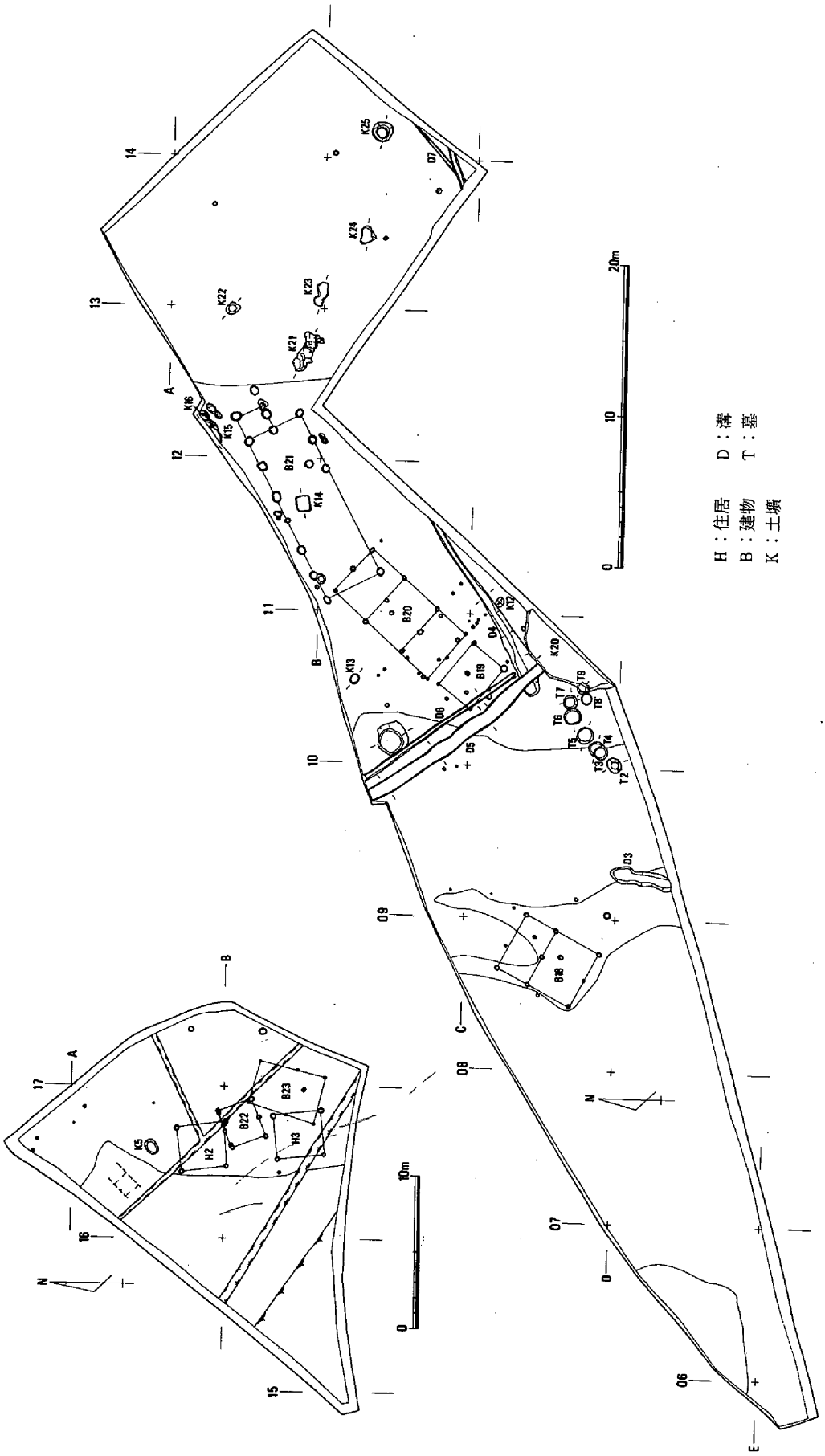
以下、時代にしたがって各遺構の概要について述べる。



第４図　調査区内地山地質図（Ｓ＝１/1200）



第５図　１区全遺構配置図（Ｓ＝１/400）



第６図　２区・３区全遺構配置図（S＝１/400）

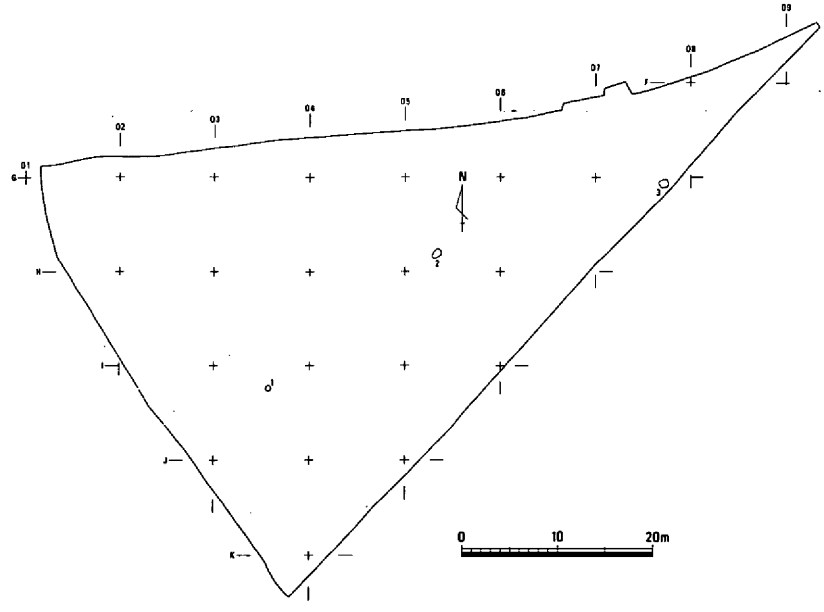
第２節　縄文時代の遺構・遺物

縄文時代の遺構は土壙が３基で、１区に散在している。いずれの土壙からも晩期の土器片が出土していることから同期の遺構と考えられる。ただ、土器編年的にはすこし幅があり、厳密にはすべてが同時に存在したとはいえない。少なくとも２時期にはわたるため、遺跡がある程度の継続性をもっていたと考えられる。縄文時代の土壙の埋土は弥生時代や中世の柱穴の埋土と類似し、目立った特徴がないため、縄文時代の柱穴の存在も推定されるが、確認できていない。

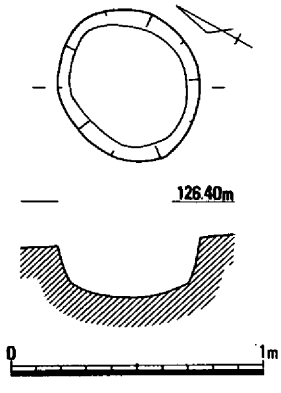
土壙１（Ｐ104）（第８・９図、図版11）

Ｉ03区の北半中央に位置する。長径63cm、短径54cmの円形に近い平面形をもち、深さは20cmを測る。埋土は黄褐色粘質土斑暗灰褐色粘質土である。壙内から縄文時代晩期の土器片が少し出土した。

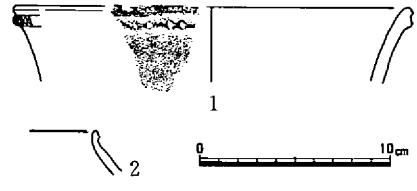
図示した遺物は２点である。１は深鉢形土器で、口縁端部を丸くおさめ、端部から少し下がった外面に突帯を貼り付けて刻み目を入れている。内外面ともにナデ調整。２は、小片のためいささか不明瞭ではあるが、浅鉢形土器の口縁部から頸部ではないかとみられる。口縁部を屈折させ、外面にわずかに肥厚させている。内外面にはヘラミガキらしい調整痕を残している。



第７図　縄文時代遺構配置図（Ｓ＝１/800）



第８図　土壙１（Ｓ＝１/30）

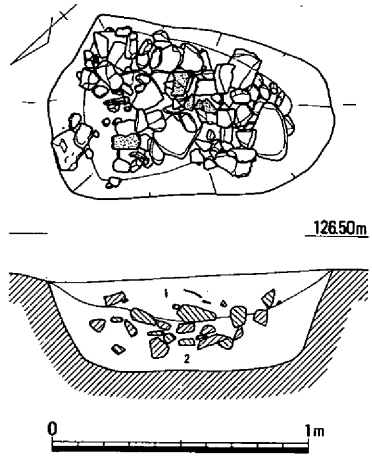


第９図　土壙１出土土器（Ｓ＝１/４）

出土した土器から判断して、土壙１の時期は沢田式期に近いのではないかと考えられる。

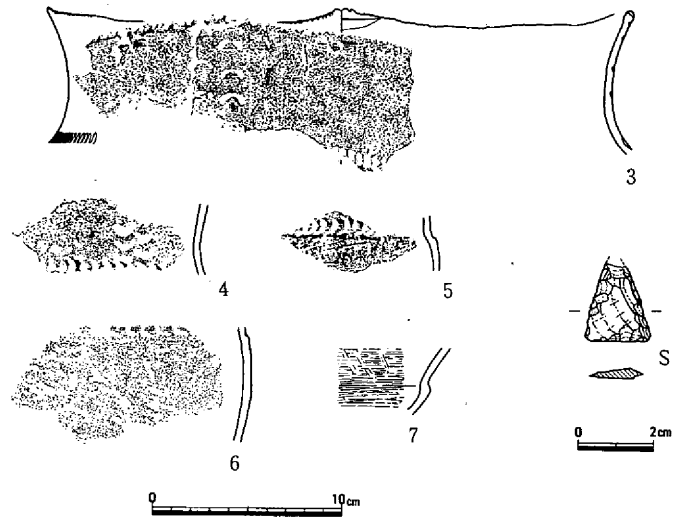
土壙２（No54）（第10・11図、図版１・11）

Ｇ05区の南西部で検出された。平面形は不整形な楕円形をしているが、これは北半が基盤層の砂礫土部分にかかっていたためにうまく発掘できなかったせいかもしれない。長径112cm、短径73cm、深さ42cmを測る。壙壁の傾斜は急で、底面は平坦に近い。埋土は２層に分けられ、上層の暗灰褐色粘質土には多量の炭粒やいくらかの土器片を含み、下層の灰黄褐色粘質土は上層より粒子が粗く、粘性も弱い。壙内には図示したようにたくさんの礫が投棄されていたが、下層に密集していた。礫の大きさは拳大から長径25cm程度のものまでで、一人で持てる大きさであったが、同一固体の破片と思われる



１．暗灰褐色粘質土（炭粒大量）
２．灰黄褐色粘質土

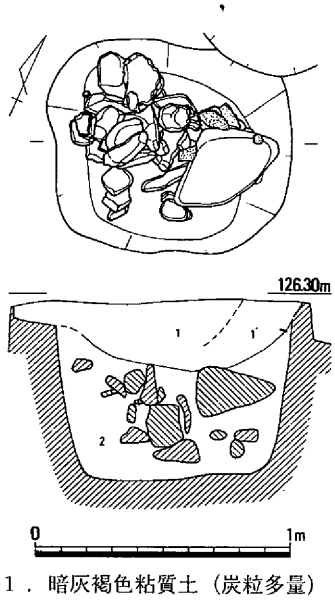
第10図　土壙２（Ｓ＝１/30）



第11図　土壙２出土土器・石器（Ｓ＝１/４・１/２）

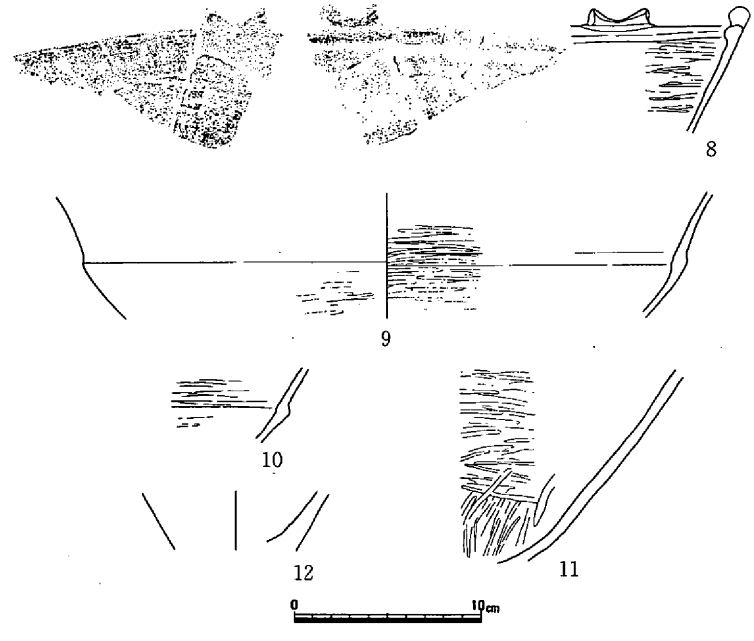
ものも認められた。石材は多種多様で、また、熱をうけて赤化したものがわずかにみられた。

遺物には土器と石器があり、上層からの出土がほとんどである。土器では深鉢形土器と精製の浅鉢形土器の両者が出土している。３～６は深鉢形土器で、波状の口縁部をもち、口縁端部に刻み目を施し、頸部から胴部にかけての屈折部分に横走する爪形文を飾っている。さらに、口縁の山状部から頸部の下端にかけて縦方向に２条爪形の圧痕を連続させる。頸部の内外面はナデ、胴部の外面はヘラケズリで調整されている。４と５は同一の固体の可能性が強い。７は浅鉢形土器で、内外面ともヘラミガキを施している。石器では石鏃が出土し、打製石鍬の材料とされる緑色片岩の破片もみられた。石鏃はサヌカイト製で、平基式の三角形鏃である。尖端を欠損しているが、長さ20.5㎜、幅17.0㎜、厚さ2.7㎜、重さ0.85ｇを測る。



１．暗灰褐色粘質土（炭粒多量）
１′．暗灰褐色粘質土（炭粒大量）
２．灰黄褐色粘質土

第12図　土壙３（Ｓ＝１/30）



第13図　土壙３出土土器（Ｓ＝１/４）

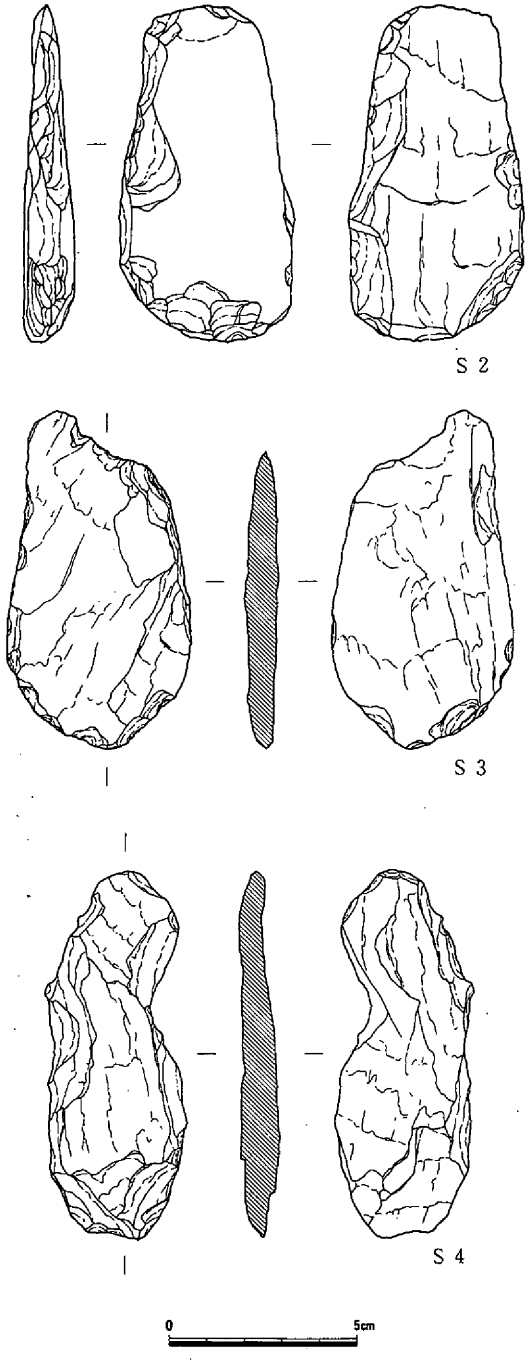
出土した土器から判断して、土壙２は晩期の谷尻式期の所産と考えられる。

土壙３（No57）（第12～14図、図版１・11・12）

Ｇ07区の北端中央付近で検出された。土壙２からは25ｍ離れている。平面形は隅丸の方形を呈する。長軸96cm、短軸85cm、深さは72cmである。壙壁は垂直に近く、底面はほぼ平坦になっている。埋土は２層で、上層は暗灰褐色粘質土、下層は灰黄褐色土である。上層には土器の大形破片と炭粒が多量に含まれている。この炭粒の量と土粒の粗さから上層は細別が可能である。下層でも中心付近では炭の大粒が含まれているが、この層の特徴は多量の礫を包含していることである。長径10～20cmの礫がほとんどだが、なかには長径45cmの大礫もあった。土壙２の礫と比べると、数は少ないものの、より大きなものが目立った。石材は多種多様で、被熱によって赤化した礫がかなりみられた。土壙２の礫とよく類似した礫も含まれていた。

遺物は土器と石器で、上層から出土している。

土器では浅鉢形土器の大形の破片が目立った。図示したものはすべて浅鉢形土器で、８と９は同一個体の可能性もある。また、10も頸部・体部境の屈曲部の形状の相違から図示したが、あるいは同一かもしれない。８は水平な口縁に、Ｍ字状の突起を飾っている。口縁端部は内側へ大きく肥厚させて丸くおさめ、その下端は沈線状をなす。内外面とも横方向のヘラミガキで丁寧に調整され、外面には煤の付着が認められる。９・10も内外面ヘラミガキで、外面に煤の付着がみられる。10の外面の頸部と体部の境にはヘラ描きの沈線を１条巡らせている。11は体部の破片で、下端は底部に近く、粘土紐の接合面で剥離している。外面は縦方向のヘラミガキ、内面は上半が横方向、下半が縦方向のヘラミガキである。12は底部である。調整痕は不明瞭。



第14図　土壙３出土石器（Ｓ＝１/２）

石器では打製の石鏃が出土している。Ｓ２は完形品で、長さ88.5mm、幅46.0mm、厚さ13.0mm、重さ74.5ｇを測る。片面に自然面を大きく残し、刃部と側辺に調整を加えている。石材は緑色片岩である。Ｓ３とＳ４は石器とは認めにくいが、その形状から石鏃の欠損品あるいは未製品の可能性があるので図示した。いずれも緑色片岩製である。Ｓ３は長さ89.0mm、幅48.0mm、厚さ9.0mmを測り、Ｓ４は長さ97.0mm、幅37.0mm、厚さ10.3mmである。

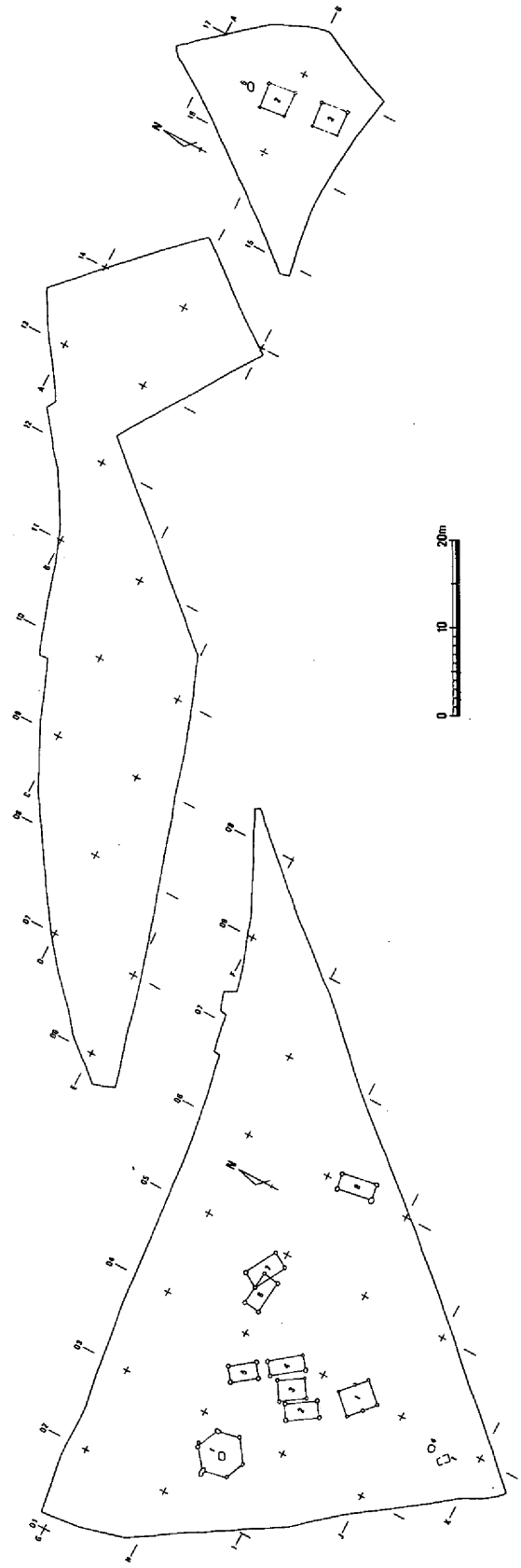
土壙３の時期も、土壙２との類似や出土土器から判断して、谷尻式期と考えられる。

第３節　弥生時代の遺構・遺物

弥生時代の遺構は１区と３区に分かれて所在している。後述するが、３区の住居の時期が中期であるのに対し、１区の住居の時期は後期であり、時期を異にする二つの集落が谷頭を挟んで立地していたと考えられる。

１区の遺構は、竪穴住居１軒と掘立柱建物８棟、それに土壙１基と配石土壙墓１基である。建物の柱穴からの出土遺物はほとんどなく、その規模や構造・配置から弥生時代の遺構と判断した。このように年代比定は困難であったため、住居との同時性に疑問もあるが、住居と建物との数の比率が通常の集落跡とはかなり相違していることが注意される。１区からは中期の土器片も出土しているため、あるいは一部に中期の建物も存在していたことが考えられ、３区の住居群と谷を隔てて倉庫群が立地するという集落構造を想定することも可能ではあろう。しかし、１区の柱穴からは後期であることが明瞭な土器が出土していて、後期の建物の存在はより確実である。

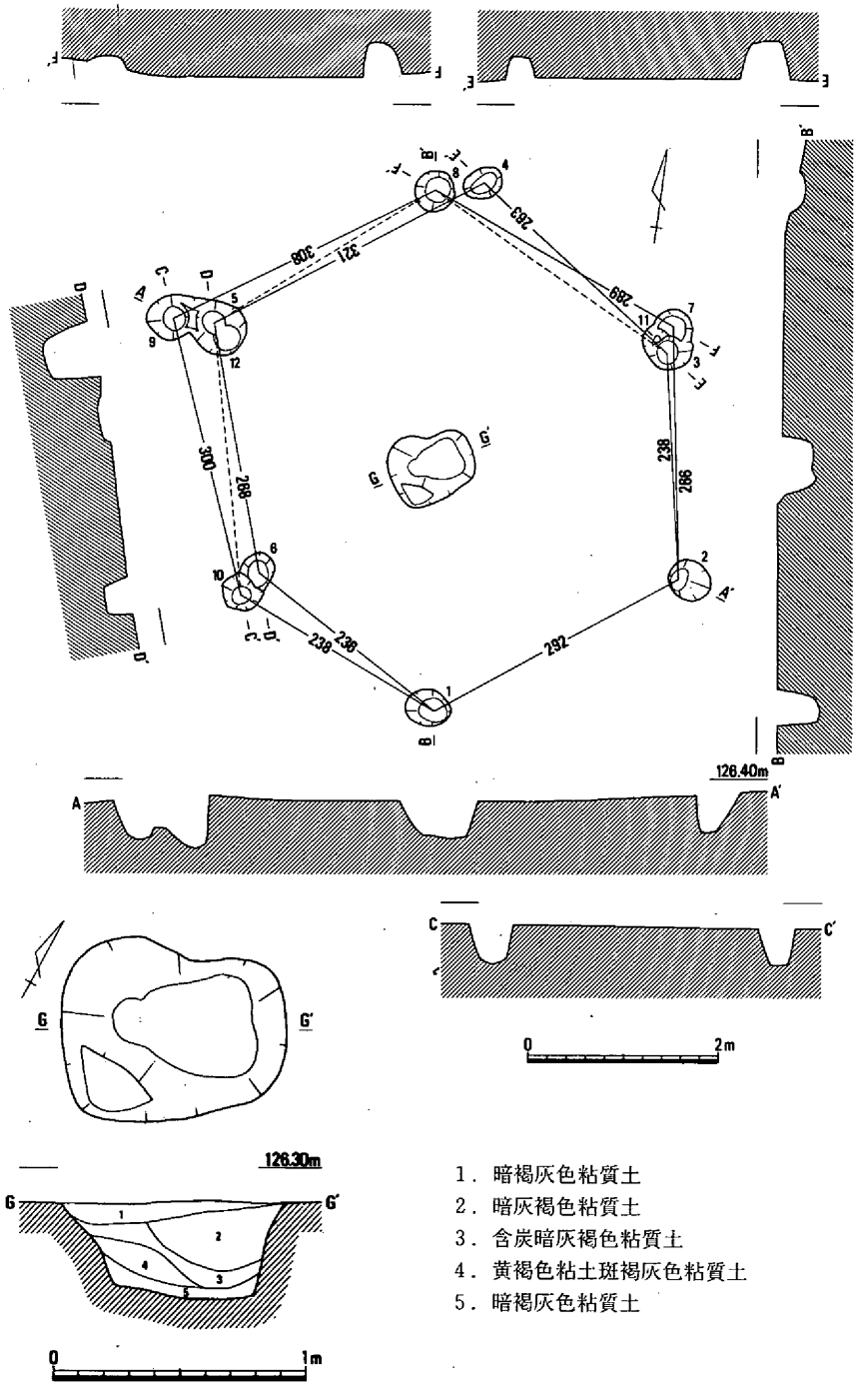
３区の遺構は竪穴住居２軒と土壙１基である。住居は同規模で棟の方位も等しくし、きわめて接近していることから建て替えによる新旧の２軒とみられる。土壙は、その規模から考えて貯蔵穴ではないかと思われる。酪農試験場跡地内におけるトレンチによる確認調査では、３区から北東方向に広がる丘陵上部平坦面で、柱穴や弥生時代中期の貯蔵穴が検出されていることから、この集落は３区から北東80ｍ付近にその中心があり、３区は集落の南西端に位置しているものと考えられる。



第15図　弥生時代遺構配置図（Ｓ＝１/800）

住居１（No50）（第16・17図、図版２・４）

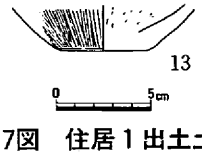
Ｈ02区で検出された。竪穴住居跡であるが、後世の削平が竪穴の床面下まで及んでいたため、中央穴と環状にめぐる柱穴が検出されたにとどまる。主柱は６本と考えられるが、４本の柱で重複が認められ、建て替えのあった可能性が強い。２本の柱では３穴の重複がある。柱穴の規模は長径



第16図　住居１（Ｓ＝１/80・１/30）

42cm～55cm、深さはもっとも深い柱穴５で57cmを測り、もっとも浅い柱穴４とは23cmの高低差がある。柱穴の埋土は、黄褐色粘質土斑暗灰褐色粘質土のものが多いが、灰黄褐色粘質土もある。中央穴の平面形は不整形な隅丸の長方形をなし、長軸90cm、短軸76cmを測る。壙壁の傾斜は急で、底面はわずかに傾斜した平面となっている。穴の深さは39cmで、柱穴と大きく変わらない。南隅に深さ８cmの段がある。中央穴の埋土は５層に分かれ、１層から３層までは炭粒を含む。１層には大形の、３層には多量の炭粒が認められる。３層と４層には地山の黄褐色粘土塊が多く含まれている。

出土遺物は僅少で、中央穴と柱穴１・５・10から土器片が出土し、中央穴からは石鏃も１点出土している。丹塗りの土器片がある。図示したものは甕形土器の底部と思われる。外面はハケ、内面はヘラケズリで調整されている。



第17図　住居１出土土器（Ｓ＝１/４）

遺物の示す年代や中央穴の規模などから、住居１の時期は後期と判断されるが、石鏃の出土をもって後期の前半とすべきであろうか。

住居２（No１）（第18・19図、図版３・12）

Ａ16区の南半からＢ16区にかけて位置する。４基の柱穴がやや不整形ながらも方形に配置されている。南西の柱穴は最近の暗渠によってかなり破壊をうけている。後述する住居３との関係などから判

断して、竪穴住居跡が後世の削平を受けて柱穴のみの残存になったものと考える。

柱穴は長径30～34cmの円形で、深さ22～42cmを測り、直径15～20cmの柱痕跡を確認した。南東柱穴のみは長径50cmと大きかった。柱穴の配置をみると、南東柱穴が方形規格から南に少しずれている。このため、柱穴間の距離は、西辺の302cmに対して、東辺は320cmと長い。北辺、南辺はともに286cmと等しく、東西辺よりは短い。西辺の示す方位は真北よりわずかに西へ振っている。削平が著しかったためか、中央穴は確認できなかった。住居１のそれよりも浅いものであったかもしれない。

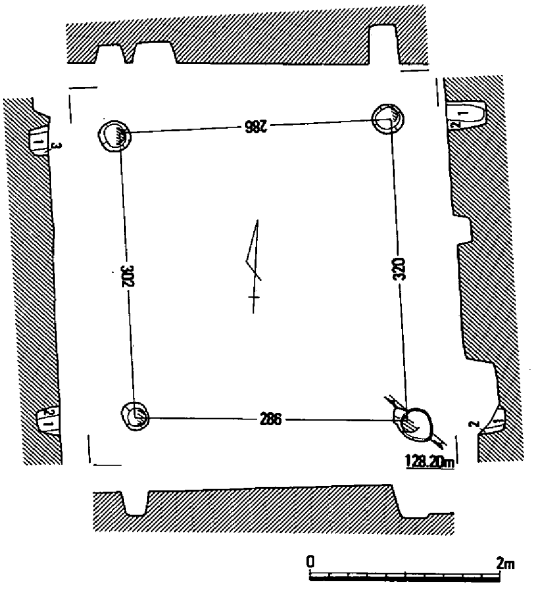
遺物は南東柱穴と北東柱穴からごく少量出土した。図示した土器は南東柱穴出土である。ともに甕形土器の小破片である。口縁端を上下に拡張させ、端面に14は２条、15は３条の凹線を巡らせる。内外面ともに荒れて調整手法は不明である。これらの土器の年代は中期中葉と考えられる。

住居２の時期は出土した土器や住居３との関係から中期中葉の新しい段階に位置づけられる。

住居３（No２）（第20・21図、図版３・12）

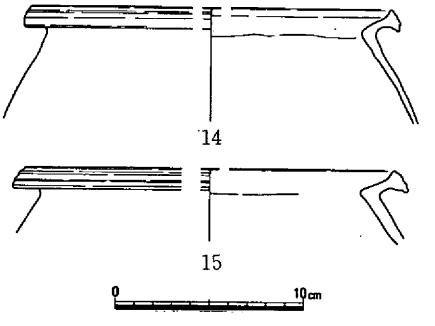
Ｂ16区で検出された。４基の柱穴が方形に配置され、柱穴間の距離は、東西が286cm、南北は308cmを測り、住居２と相似している。柱穴の規模は、平面円形の長径が26～42cm、最深で32cmである。柱痕跡は明瞭で、直径15～24cmあり、北西柱穴では、柱痕跡の中に土器（16）の大形破片が詰まっていた。住居３でも南東の柱穴が他に比べて大きく、住居２との類似性が際立っている。西辺の方位は真北から少し西に振り、住居２とほぼ平行する。住居２の南辺と住居３の北辺との距離は3.3ｍと接近し、屋根の構造からして同時の存在は困難であろう。津山市域では、押入西遺跡を代表例として、弥生時代中期の集落跡で近接して２軒の住居跡が検出されることが多く、大田茶屋遺跡もその例にあたるのではないかと考えられる。

４基の柱穴すべてから土器の出土をみている。16は壺形土器で、北西柱穴の柱痕跡内より口頸部から胴部の上端にかけての破片がかなりまとまって出土した。口縁部は大きく外反させ、上面が水平面となっている。この水平面と頸部内面との境には突帯の巡っていた可能性が高い。水平面には櫛描きの波状文が飾られている。頸部の下半には７条からなる凹線文を施し、胴部の上端にも櫛描き波状文がかすかに残存している。頸部外面の調整はハケ、内面はナデ。胴部内面には指頭圧痕が顕著で、ハケがみられる。17・18は甕形土器で、17は北西柱穴、18は北東柱穴から出土している。いずれも口縁端部をわずかにつまみ上げている。口縁部は

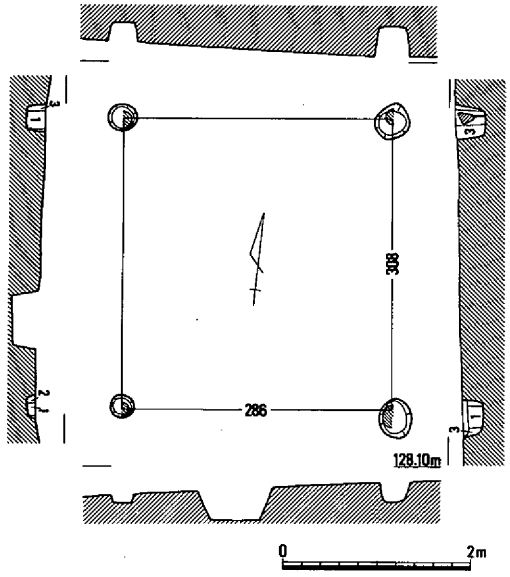


１．黒褐色粘性砂質土　　３．暗灰褐色粘質土
２．黄褐色斑灰褐色粘質土

第18図　住居２（Ｓ＝１/80）

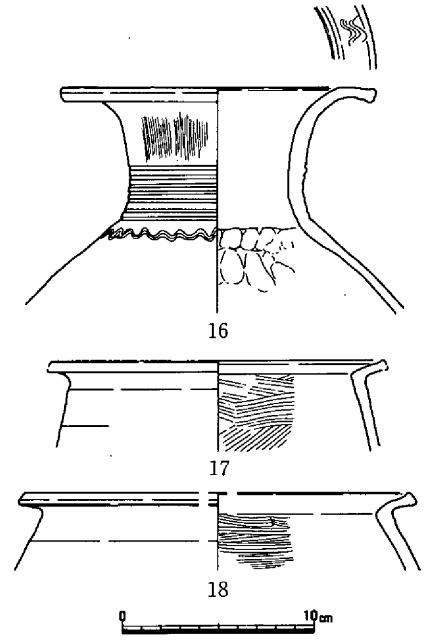


第19図　住居２出土土器（Ｓ＝１/４）



1．黒褐色粘性砂質土　2．褐色粘性砂質土
3．淡灰褐色斑黄褐色粘質土

第20図　住居３（Ｓ＝１/80）



第21図　住居３出土土器（Ｓ＝１/４）

ヨコナデ、胴部内面はハケによる調整がなされている。17の胴部外面はヘラミガキを施すようで、18の外面はナデ調整のようである。これらの土器の示す年代は中期中葉の中頃から新しい段階と考えられる。

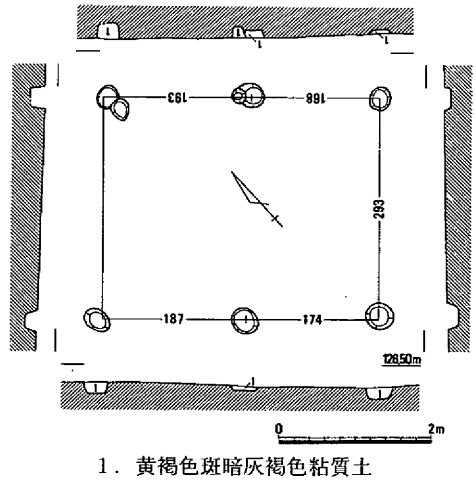
住居３の時期は、同一ともいえる相似性をもつ住居２と連続することは確実で、出土した土器から判断すれば住居２に先行すると考えられる。したがって中期中葉の中頃が妥当かとみられる。

建物１（No30）（第22図、図版４）

Ｉ03区とＩ04区とにまたがって検出された、２間×１間の掘立柱建物である。柱穴は円形で、長径31～37cmを測る。残存状況は悪く、もっとも深いものでも22cmにすぎない。埋土は黄褐色斑暗灰褐色粘質土である。建物の規模は梁間293cm、桁行361cmで、面積は10.6m²となる。桁行の中央柱穴は南にずれている。棟の方向はＮ－47°30′－Ｗを測る。北桁行の柱穴から弥生土器片が出土している。

建物２（No29）（第23図、図版４）

Ｈ03区とＩ03区にまたがる掘立柱建物である。１間×１間で、梁間190cm、桁行374cm、面積は7.1m²を測る。梁間と桁行の比率は１：1.97となる。棟の方向はＮ－33°30′－Ｗである。柱穴は円形で、長径が47～56cmあり、最深のもので28cmにすぎない。北西の柱穴では柱のめり込みが認められ、直径22cmを測った。埋土は黄褐色斑暗灰褐色粘質土である。北東柱穴から弥生土器の小片が出土した。

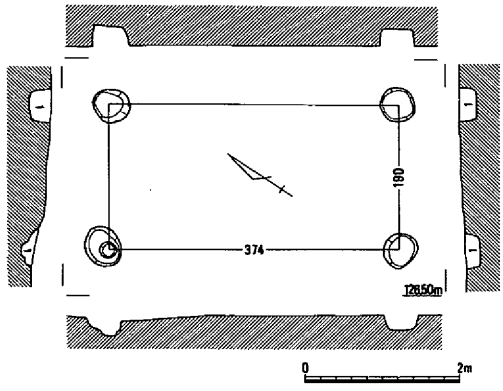


1．黄褐色斑暗灰褐色粘質土

第22図　建物１（Ｓ＝１/100）

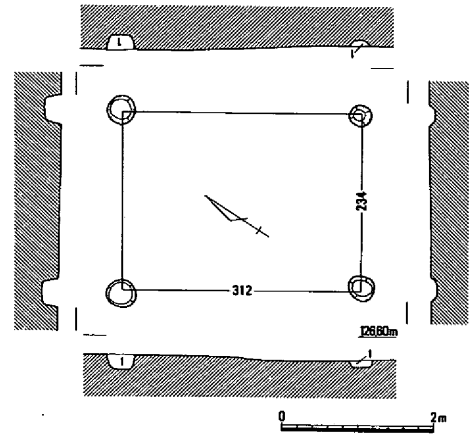
建物３（No40）（第24図、図版４）

Ｈ03区の南東部に位置する１間×１間の掘立柱建物である。梁間234cm、桁行312cmを測り、その比率は１：1.33となる。床面積は7.3m²である。棟の方向はＮ



１．黄褐色斑暗灰褐色粘質土

第23図　建物２（S＝１/100）



１．黄褐色斑暗灰褐色粘質土

第24図　建物３（S＝１/100）

－32°30′－Ｗで、建物２とほぼ平行していて、南桁行と建物２の北桁行との距離はわずか30cmにすぎない。柱穴は円形で長径29～39cm、最深20cmを測る。

建物４（No43）（第25図、図版４）

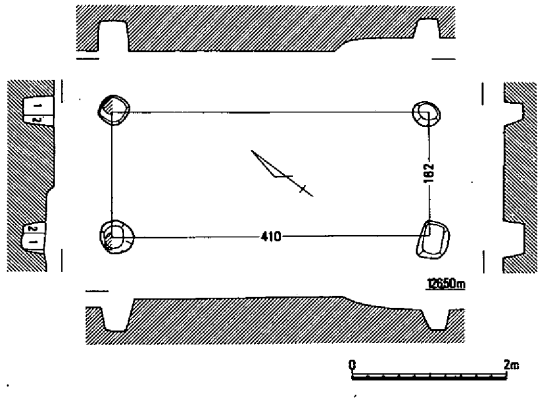
Ｈ03区の東端からＨ04区にかけて検出された。１間×１間の掘立柱建物で、梁間162cm、桁行410cm、面積6.6m²を測る。梁間と桁行の比率は１：2.53となる。棟の方向はＮ－37°30′－Ｗである。柱穴は、北東と南西が方形、南東と北西が円形に近い。長径は36～52cm、最深で40cmとなる。北梁間の柱穴では柱痕跡が確認され、23cmを測る。埋土は黄褐色斑暗灰褐色粘質土である。

建物５（No44）（第26図、図版４）

Ｈ03区の北半に位置する１間×１間の掘立柱建物である。規模は、梁間184cm、桁行324cm、面積6.0m²を測る。梁間と桁行の比率は１：1.76である。棟の方向はＮ－36°－Ｗで、建物４とほぼ平行する。南梁間と建物４の北梁間との距離は1.25ｍと近接している。柱穴は円形ないし楕円形で、長径47～60cm、最深33cmを測る。埋土は黄褐色斑暗灰褐色粘質土である。

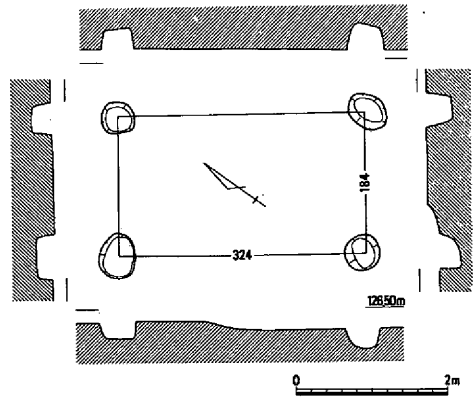
建物６（No35）（第27図、図版４）

Ｇ04区の南端で検出された１間×１間の掘立柱建物で、建物７と重複している。梁間186cm、桁行398cm、面積は7.4m²である。梁間と桁行の比率は１：2.14となる。棟の方向はＮ－90°－Ｗを測る。柱穴は円形で、長径36～48cm、深さは２～21cmと遺存状況は悪い。埋土は黄褐色斑暗灰褐色粘質土。

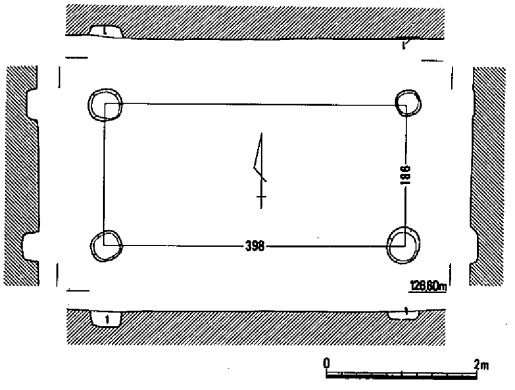


１．暗褐灰色粘質土　２．黄褐色斑暗灰褐色粘質土

第25図　建物４（S＝１/100）

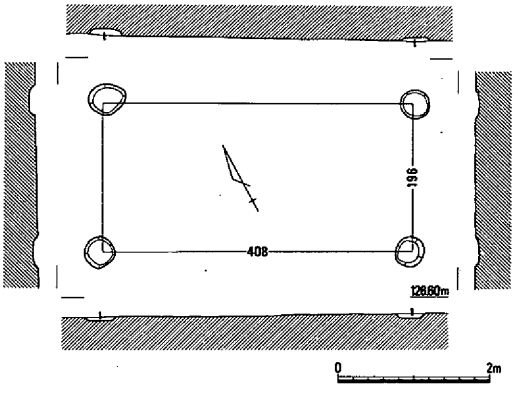


第26図　建物５（S＝１/100）



１．黄褐色斑暗灰褐色粘質土

第27図　建物６（Ｓ＝１/100）



１．黄褐色斑暗灰褐色粘質土

第28図　建物７（Ｓ＝１/100）

建物７（No36）（第28図、図版４）

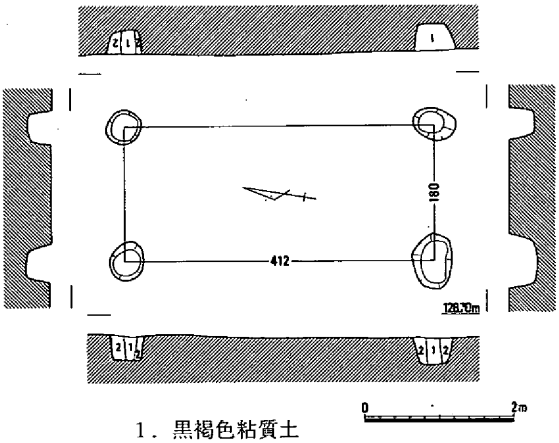
Ｇ04区の南東隅に位置し、建物６と重複する。１間×１間の掘立柱建物で、梁間196cm、桁行408cm、面積8.0㎡の規模をもつ。梁間と桁行の比率は１：2.08である。棟の方向はＷ－62°－Ｎを測る。柱穴は円形で、長径40～51cm、最深で９cmとごく浅い。埋土は黄褐色斑暗灰褐色粘質土である。

建物８（No39）（第29図）

Ｈ05区とＨ06区にまたがって検出された掘立柱建物である。１間×１間で、梁間180cm、桁行412cm、面積は7.4㎡を測る。梁間と桁行の比率は１：2.29となる。棟の方向はＮ－９°30′－Ｗである。柱穴は円形か楕円形で、長径48～73cm、深さは31～38cmである。南東柱穴を除き、柱痕跡が確認され、その幅は20cm前後を測る。すべての柱穴から土器片が出土し、弥生土器と考えられるものがある。

土壙４（No47）（第30図）

Ｊ03区の中央東端に位置する。不整形な円形で、長径89cm、短径81cmを測る。壙壁の傾斜は一様でなく、西側は緩い。底面は少しくぼんだ平面となっている。深さは28cmである。この土壙は明瞭なかたちでは検出できず、また、遺物もなかったことから、他の中世の土壙とは時代を異にすると考えられるものの、弥生時代の遺構とは断言できない。埋土には黒褐色粘土の小さなブロックを含む。



１．黒褐色粘質土
２．黄褐色粘質土

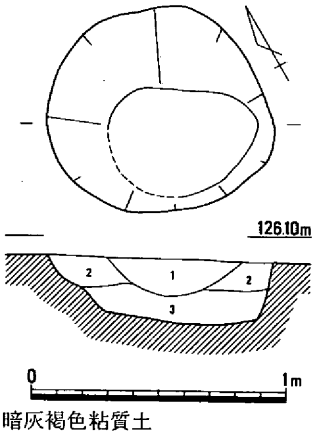
第29図　建物８（Ｓ＝１/100）

土壙５（No４）（第31図）

Ａ16区の中央で検出された。平面形は楕円形で、長径106cm、短径74cm、深さは67cmを測る。壙壁の傾斜は急で、底面はかすかな凹面となっている。埋土は暗灰褐色粘質土である。出土遺物はごくわずかな土器片だが、弥生土器とみられるものがある。土壙５は住居２の北1.5ｍに位置しているため、住居の残存状況から推測すると、土壙５の深さは100cmを超えていたと考えられる。その形状からすると貯蔵穴のような用途が想定される。

墓１（No42）（第32図、図版４）

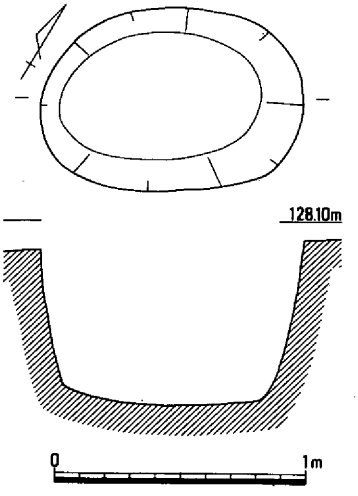
Ｊ03区の南東部に位置する。長方形の墓壙内



1．暗灰褐色粘質土
2．暗灰黄褐色粘質土
3．灰黄褐色粘質土斑暗灰黄褐色粘質土

第30図　土壙４（Ｓ＝１/30）

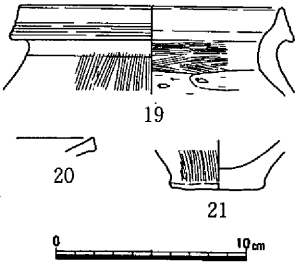
の縁辺部に石を積み上げた配石土壙墓である。墓壙の長軸方向はＮ－48°－Ｗで、墓壙の短辺は南東側が北西側より広くなっている。墓壙の規模は、長軸141cm、南東短辺幅84cm、北西短辺幅73cmを測る。内法では長軸132cm、短軸62～77cmとなる。墓壙の底部は平坦に近いが、中央付近がもっとも深く、北西短辺側は南東短辺側より３cm高い。墓壙の深さは14cmであるが、配石の頂点からは21cmとなる。配石は北西短辺側と北東長辺側の南半に密集がみられ、南東短辺側には石が置かれていない。配石の密集部分では２～３段に石を積み上げている。石材には割石と河原石の両方が使用されていたが、多くが河原石だった。石の大きさは長径10～30cmで、15cm程度のものが多数を占めていた。埋土は暗灰褐色粘質土である。埋土中から赤色の顔料の粒が検出され、第32図に示すように点々と集中が認められた。顔料は床面に付着したものもあったが、床面から５cm程浮いているものもみられた。付載で述べられるように、この顔料は水銀朱で、顕微鏡による観察では骨片に付着していることが確認されたことから、この遺構は埋葬施設としてよい。木棺痕跡は認められなかったが、配石の状況からみて木棺が使用されたと考えられ、木棺の規模は長さ110cm、幅40cm程度と推定される。出土遺物がまったくみられなかったため、墓１の確実な年代はおさえられないが、遺構の形態や周辺の状況から考えて、弥生時代後期の遺構と推定される。



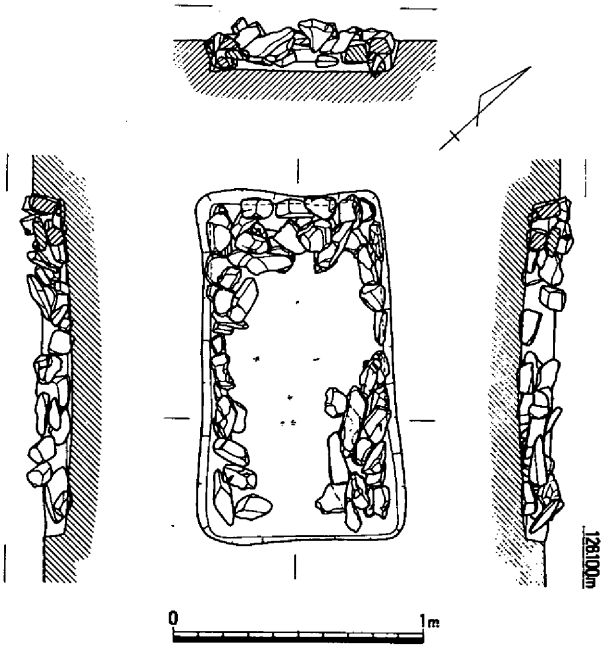
第31図　土壙５（Ｓ＝１/30）

遺構に伴わない遺物（第33図、図版12）

いずれも１区の柱穴から出土していて、後期の土器と考えられる。19は甕形土器で、胴部内面は上端までヘラケズリされる。20は口縁の小片で端部の拡張は小さい。21は壺形土器の底部か。外面はヘラミガキ。



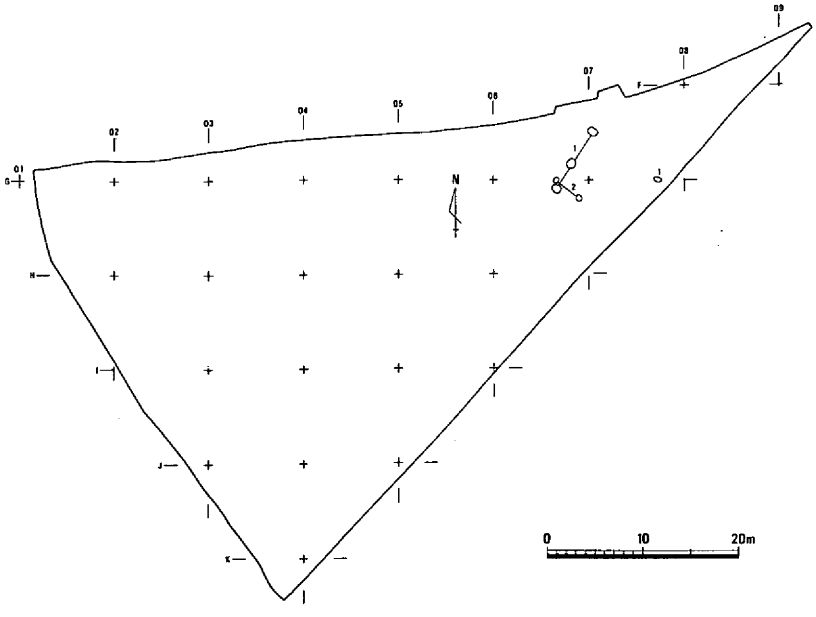
第33図　1区出土土器（Ｓ＝１/４）



第32図　墓１（Ｓ＝１/30）

第４節　　古代の遺構・遺物

古代の遺構は１区の北東部に集中して検出された。柱穴列２列と柱穴１基にすぎない。柱穴列からはなんらの遺物も出土せず、埋土が近接する近世遺構のそれと類似し、大きな礫を包含する柱穴があったことから、検出当初は近世の遺構と考えていた。しかし、柱穴としては規模が大きく、平面形が方形に近いものがあったり、底に礎石を持つものもあり、これらの形態的な特徴から古代の遺構と判断した。しいて言えば、古代でも奈良時代に属するものではないかとみられ、確認調査のトレンチではその時代の土器片が１区から出土している。



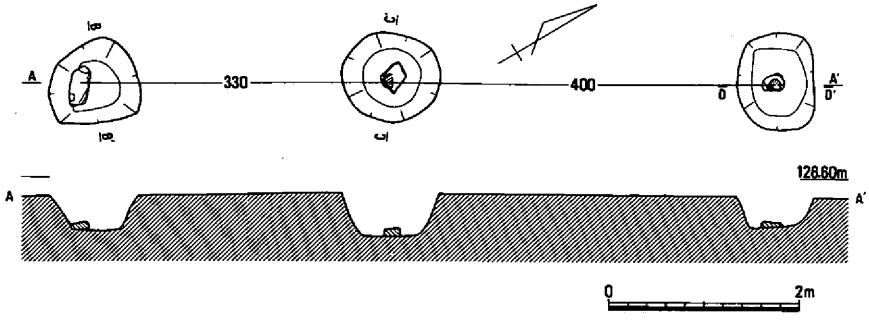
第34図　古代遺構配置図（Ｓ＝１/800）

柱穴列１（No58～60）（第35・36図、図版８）

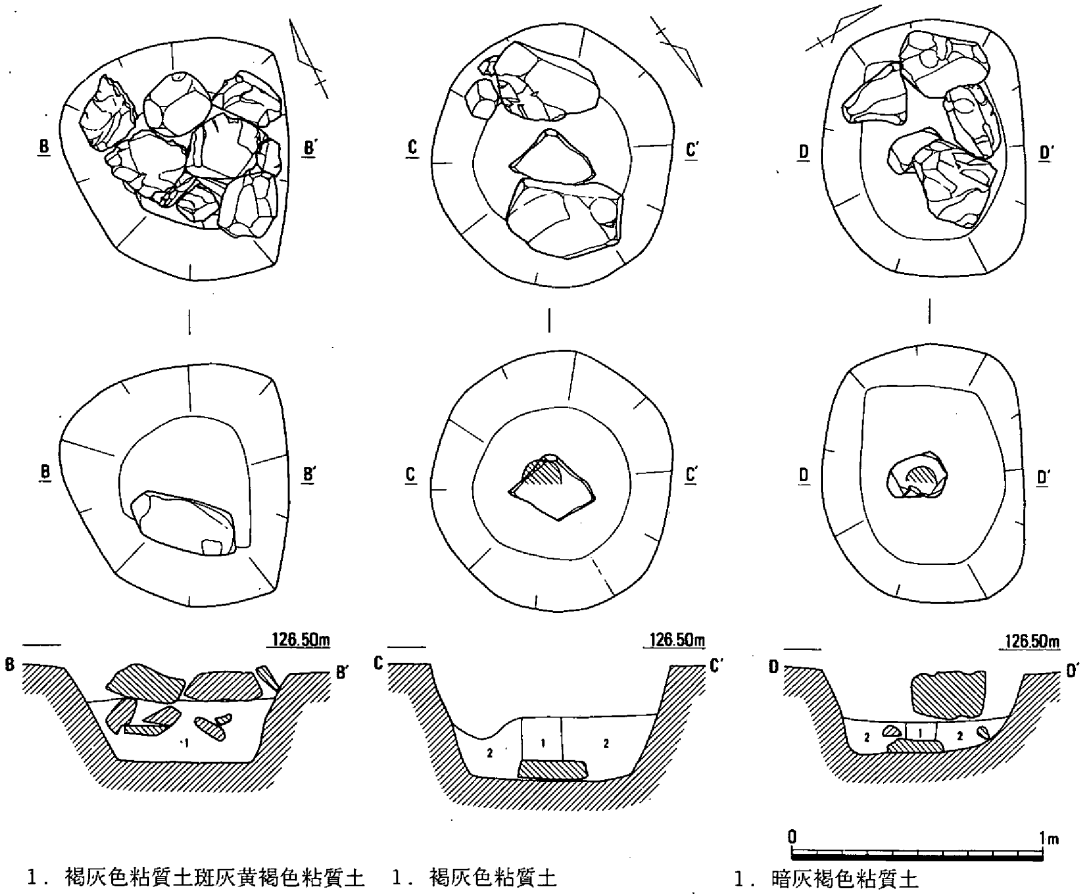
Ｇ06区の北端からＦ07区の西端にかけて１列に並ぶ３基の柱穴を検出した。検出面では、各柱穴ともに長径25～45cmの大きな礫が複数個包含されているのが確認され、さらに柱穴を掘り下げると、それぞれに底面に礎石を据えていることが判明した。この３個の礎石は直線で結ぶことができたが、礎石間の距離は南が330cm、北が400cmと異なっていた。この直線の方向はＮ－31°30′－Ｅを示す。

北側の柱穴は隅丸の長方形を呈し、長軸103cm、短軸80cm、深さは34cmを測る。穴の上半には長径27～37cmの礫が４個置かれていた。礫を取り去ると直径12cmの柱痕跡が現れ、その直下には長径24cmの平たい礎石が底面に接して据えられていた。中央の柱穴は円形で、長径105cm、短径95cm、深さ46cmを測る。穴の上半の礫は２個で、長径は43cmと45cmである。柱痕跡は直径15cm、礎石は長径35cmであった。南側の柱穴は不整形な方形で、長軸97cm、短軸89cmの規模で、穴の上半には９個の礫が重なるように置かれていた。礫は長径25～35cmのものが多かった。柱痕跡は確認されず、長径44cmの礎石が南隅に片寄って座っていた。

３基の柱穴の状況はよく類似している。



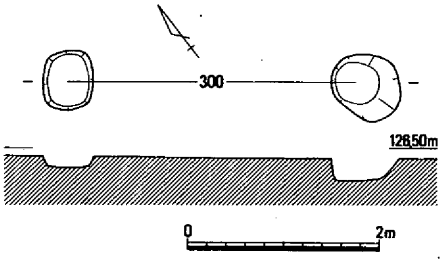
第35図　柱穴列１　全体図（Ｓ＝１/80）



１．褐灰色粘質土斑灰黄褐色粘質土　１．褐灰色粘質土　１．暗灰褐色粘質土
２．黄褐色粘土斑灰褐色粘質土　２．黄褐色粘土斑灰褐色粘質土

第36図　柱穴列１　各柱穴図（Ｓ＝１/30）

北側柱穴では上半の礫が柱痕跡の上に乗っている。このことから、上半の礫を礎石の根石とみて、掘立柱から礎石立ち建物への転換を考えられないだろうか。



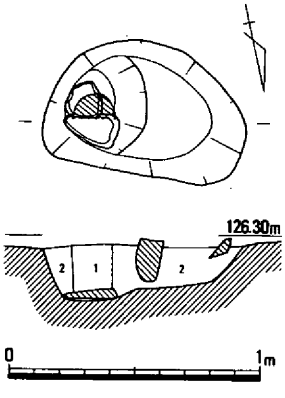
第37図　柱穴列２（Ｓ＝１/80）

柱穴列２（No66）（第37図、図版８）

Ｇ06区の北東隅にあり、柱穴列１と交差している。規模と埋土を等しくする柱穴が対で検出された。柱穴間の距離は300cm、柱穴を結ぶ直線の方向はＮ－52°30′－Ｗである。西柱穴は方形で、長軸32cm、短軸26cm、深さ12cmを測る。東柱穴は円形で、長径38cm、短径33cm、深さ23cmとなる。埋土は黄褐色粘質土斑淡灰褐色粘質土である。出土遺物はない。

柱穴１（No62）（第38図）

Ｆ07区とＧ07区との境界に位置する。縄文時代の土壙３を破壊して掘られている。平面形は不整形な長方形をなす。長径80cm、短径53cmを測る。底面は２段になり、深い部分に平らな礎石が２個置かれている。礎石の上で直径16cmの柱痕跡を検出した。穴の深さは22cmである。



１．暗灰褐色粘質土
２．黄褐色粘土斑暗灰褐色粘質土

第38図　柱穴１（Ｓ＝１/30）

第５節　　中世の遺構・遺物

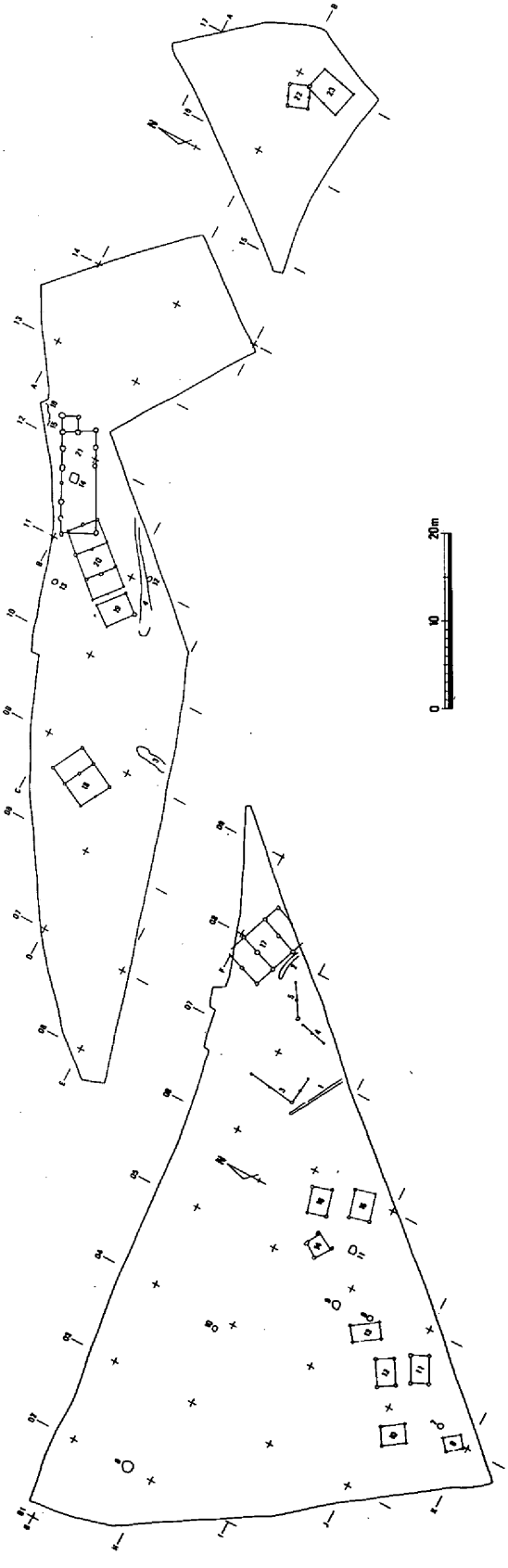
中世の遺構は１区から３区までの調査区全域に広く分布する。おおむね基盤層の粘質土部分に位置しているが、砂礫土の部分に掘り込まれた遺構もある。掘立柱建物15棟、柱穴列３列、土壙11基、溝４条が検出された。建物のうち、大形の建物の柱穴からは中世の遺物が出土し、年代が明瞭であるが、小形の建物や柱穴列のほとんどは遺物を出土せず、柱穴の規模や礎石の有無等から中世の遺構と判断した。本遺跡が各時代の複合遺跡であることから、いくつかの小形の建物は他の時代に属する可能性もある。また、溝についても、近世以降の溝や中世の建物との位置（平行）関係から中世の遺構と判断しているが、近世以降に降る可能性も否定できない。土壙についても遺物の出土しなかったものがほとんどで、弥生時代に遡ることもありうる。

建物は、１間×１間の小規模なものが半数以上を占めるが、梁間・桁行ともに２間以上の住居と考えられる建物が４棟ある。この４棟の建物は、重複関係にある１棟を除く３棟が20ｍ前後の距離を保って配置されていて、それぞれ１軒の家として集落の中で同時に存在していた可能性が考えられる。小形の建物は１区の南東部にかたまっているが、隣接して棟の方向を平行ないしは直交するものがあり、これらも同時存在の可能性がある。なお、建物としてまとめられなかった柱穴も多くあり、中世にはこの丘陵端部一帯に集落が存在していたのであろう。

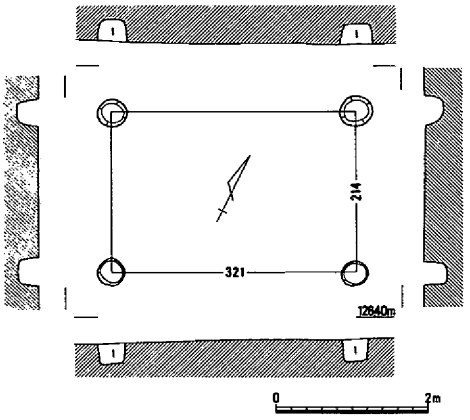
建物９（No33）

Ｊ03区からＪ04区にかけて位置する。１間×１間の掘立柱建物で、梁間164cm、桁行204cm、面積3.3㎡を測る。棟の方向はＮ－37°－Ｗである。柱穴は円形で、長径18～31cmと幅がある。最深の柱穴で20cmと浅い。柱穴の埋土は暗灰褐色粘質土である。弥生土器片が出土した。

建物10（No34）（図版２）



第39図　中世遺構配置図（Ｓ＝１/800）



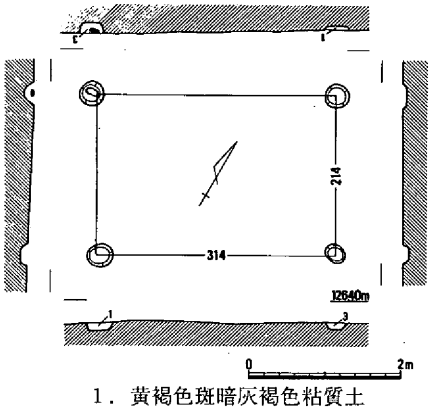
１．黄褐色斑暗灰褐色粘質土

第40図　建物11（S＝1/100）

Ｊ03区の北西部で検出された。１間×１間の掘立柱建物で、梁間224cm、桁行279cm、面積6.2m²を測る。棟の方向はＮ－31°30′－Ｗである。柱穴は不整形な円形で、長径25～31cmだが、不揃いな印象を与える。柱穴の深さは９～20cm、埋土は黄褐色斑暗灰褐色粘質土である。

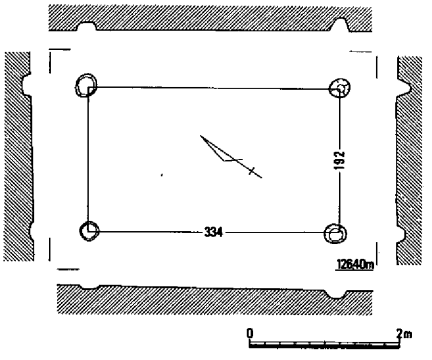
建物11（No32）（第40図、図版２）

Ｊ04区の北半に位置する。１間×１間の掘立柱建物で、梁間214cm、桁行321cm、面積6.9m²を測る。棟の方向はＮ－64°－Ｅである。柱穴は円形で、長径34～44cmとやや大きい。柱穴の最深は30cm、埋土は黄褐色斑暗灰褐色粘質土である。弥生土器片が出土した。



１．黄褐色斑暗灰褐色粘質土
３．暗灰褐色粘質土

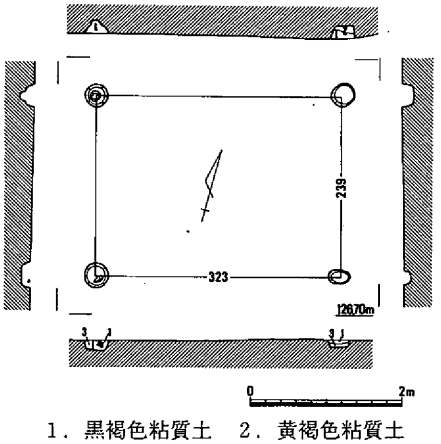
第41図　建物12（S＝1/100）



第42図　建物13（S＝1/100）

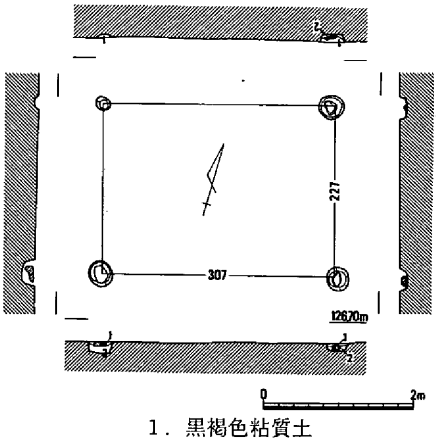
建物12（No31）（第41図、図版２）

Ｉ04区の南半に位置する。１間×１間の掘立柱建物で、梁間214cm、桁行314cm、面積6.7m²を測る。建物11と同規模で、棟の方向もＮ－60°－Ｅとほぼ平行している。柱穴は円形で、長径28～34cm、最深15cmである。弥生土器片が出土した。



１．黒褐色粘質土　２．黄褐色粘質土
３．黄褐色斑暗灰褐色粘質土

第43図　建物15（S＝1/100）



１．黒褐色粘質土
２．黄褐色粘質土

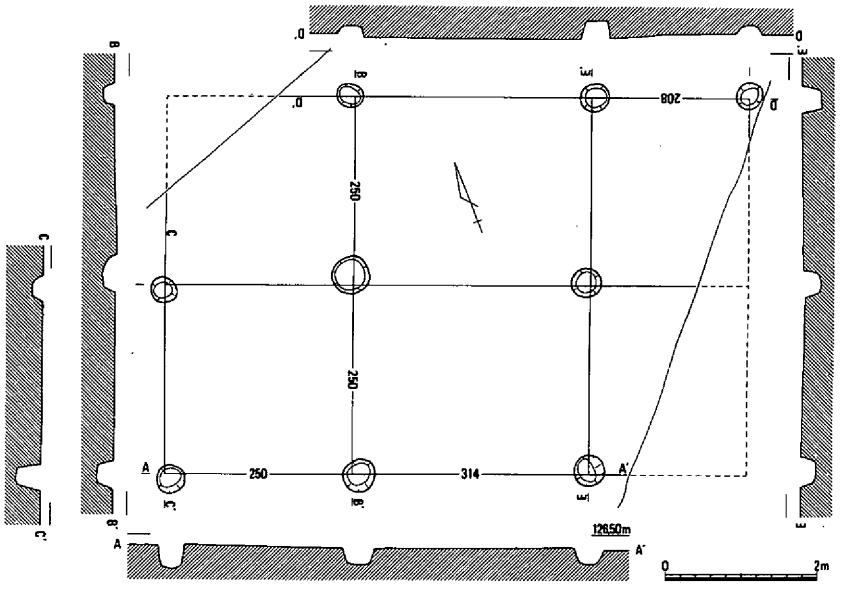
第44図　建物16（S＝1/100）

建物13（No69）（第42図、図版２）

Ｉ04区の中央付近で検出された。１間×１間の掘立柱建物で、梁間192cm、桁行334cm、面積6.4m²を測る。棟の方向はＮ－35°－Ｗを示す。柱穴は円形で長径25～32cm、埋土は黄褐色斑暗灰褐色粘質土である。

建物14（No68）

Ｈ05区の中央西に位置する。１間×１間の掘立柱建物であるが、３柱穴で柱の重複が認められた。



第45図　建物17（Ｓ＝１/100）

梁間172cm、桁行240cm、面積4.1m²を測る。棟の方向はＮ－18°30′－Ｅであった。柱穴は円形で、長径27～45cmと幅がある。柱穴の最深は28cm、埋土は黄褐色斑暗灰褐色粘質土である。

建物15（No38）（第43図、図版５）

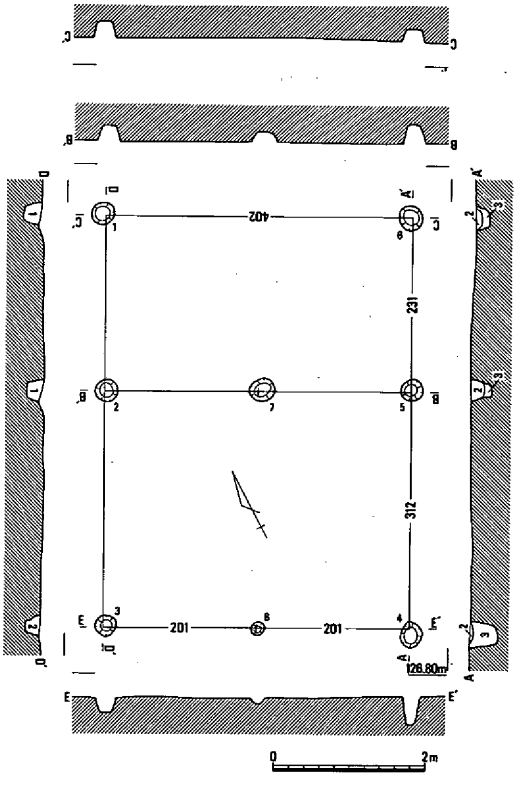
Ｈ05区とＨ06区とにまたがって位置する。１間×１間の掘立柱建物で、梁間239cm、桁行323cm、面積7.7m²である。棟の方向はＮ－74°30′－Ｅを測る。柱穴は円形で、長径が28～33cmあり、北西の柱穴では直径13cmの柱のめり込みが認められた。

建物16（No37）（第44図、図版５）

Ｈ05区の北東部に位置する。１間×１間の掘立柱建物で、梁間227cm、桁行307cm、面積7.0m²である。棟の方向はＮ－74°30′－Ｅで建物15と平行し、その距離は2.5ｍを測る。柱穴は円形で、礎石の残存していた３基は長径33～35cm、１基は20cm。

建物17（No41）（第45図、図版５・13）

Ｆ07区からＦ08区にかけて検出された大形の掘立柱建物である。規模は３間×２間で、桁行全長772cm、梁間全長500cm、面積38.6 m²を測る。柱間は、梁間が250cm等間、桁行は208・250・314cmとそれぞれ異なる。柱穴は円形で、長径36～51cmと幅があり、東西両辺の柱穴がやや小さいようである。とくに、東辺は隣の柱穴列との桁行柱間が短く、庇の柱穴列の可能性がある。西辺も庇とすれば、この建物は南北棟で、東西に庇を付けた構造となる。梁間の柱穴列の方向はＮ－68°30′－Ｗである。柱穴の埋土は黒紫褐色粘質土で、中世の土器片と断面方形の鉄釘が出土している。

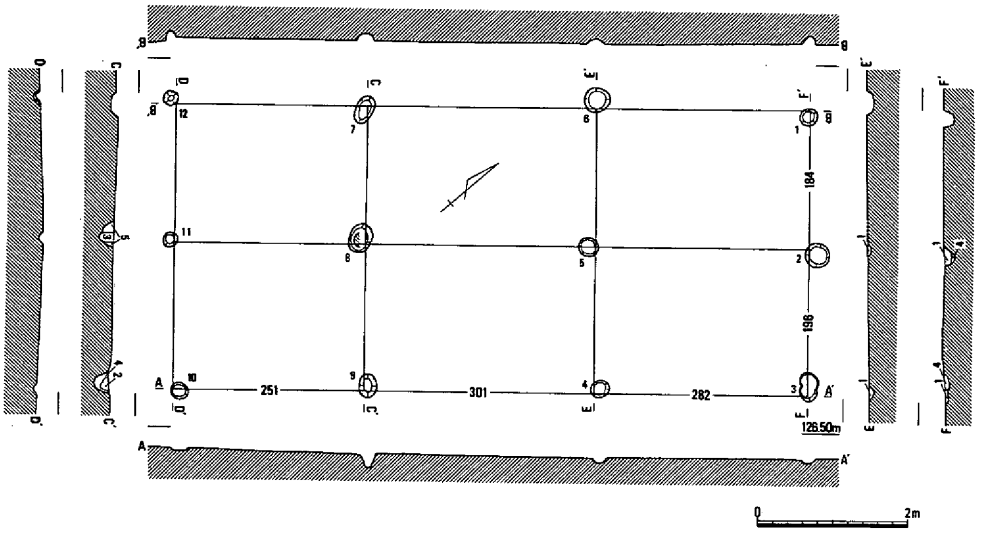


１．暗褐色粘質土
２．赤褐色・黄褐色斑暗褐色粘質土
３．灰褐色斑赤褐色・黄褐色粘質土

第46図　建物18（Ｓ＝１/100）

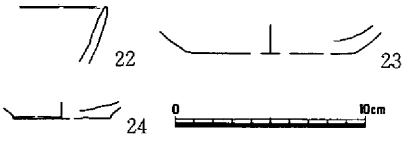
建物18（No28）（第46図、図版６）

Ｃ08区に位置する。２間×２間の大形掘立柱建物で、梁間全長402cm、桁行全長543cm、面積21.8m²を測る。柱間は、梁間が201cm等間、桁行は231・312cmである。柱穴は円形で長径28～33cmだが、柱



1．灰褐色粘質土斑暗灰褐色粘質土　4．灰黄褐色粘質土斑黒褐色粘質土（炭粒）
2．暗灰褐色粘質土　5．灰黄褐色粘質土斑暗灰褐色粘質土
3．灰黄褐色粘質土斑黒褐色粘質土

第47図　建物20（S＝1/100）



第48図　建物20出土土器（S＝1/4）

穴８は長径18cmと小さく浅い。北辺では中央に柱穴がなく、北半分を庇と考えることもできそうだが、柱穴１と６の規模は他の柱穴と変わらず、また、柱穴７・８がともに浅くて束柱的なことから、本来は２間×１間の建物であったとみられる。棟の方向はＮ－27°30′－Ｅ。

建物19（No77）

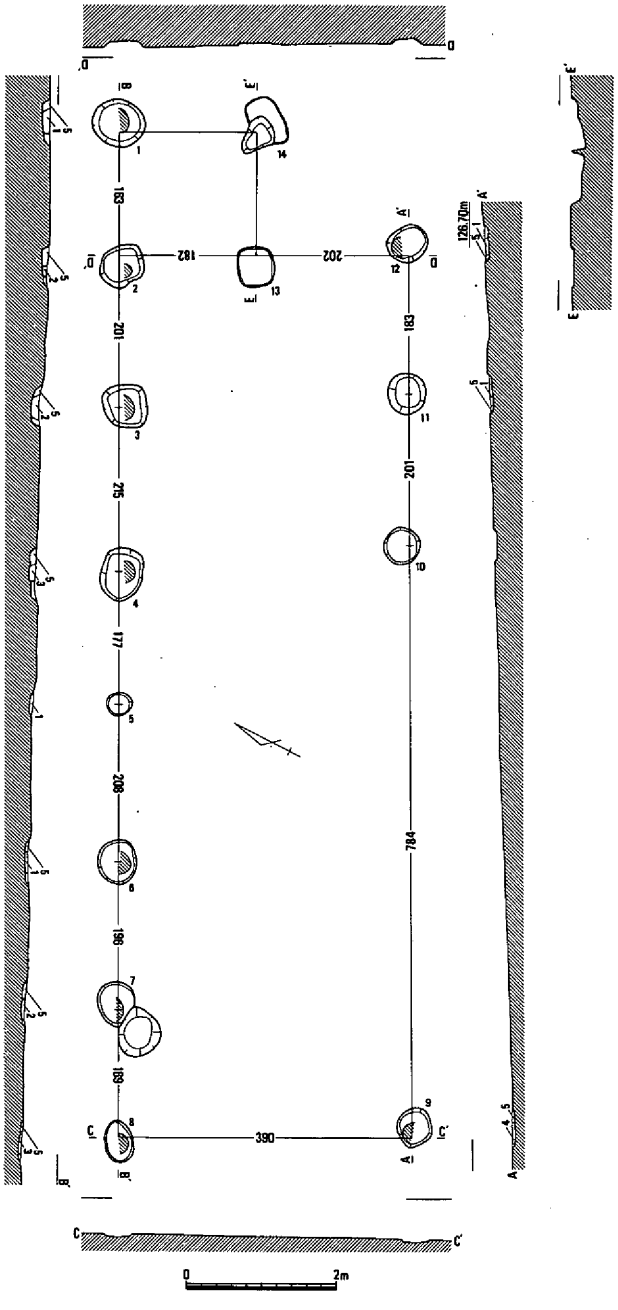
Ｂ10区とＣ10区にまたがって位置する。調査後の整理で建物と認識した。１間×１間の掘立柱建物で、桁行352cm、梁間は256・268cm、面積は9.2㎡である。棟の方向はＮ－52°－Ｗを測る。柱穴は円形で、長径は東辺が31・46cm、西辺は21cmと大きく異なる。柱穴の最深は12cm、埋土は黄褐色斑暗灰褐色粘質土である。南東柱穴で直径22cmの柱痕跡を確認した。

建物20（No27・72）（第47・48図、図版６・７）

Ｂ10区からＢ11区にかけて位置する大形の掘立柱建物である。発掘調査時には２棟の建物を想定していたが、図示したように柱穴が直線で結べるため、３間×２間の建物と考えたい。規模は梁間全長380cm、桁行全長834cm、面積31.7㎡である。棟の方向はＮ－41°30′－Ｅとなる。柱間は、梁間が184・196cm、桁行は251・282・301cmとすべて異なる。柱穴は円形で、長径21～39と幅がある。とくに柱穴10～12は小さくてきわめて浅いため、南側の１間を庇と考えることもできる。柱穴８の柱痕跡は直径20cmである。建物20の柱穴３・４からは図示した土師器が出土した。22・23は杯、24は小皿である。23・24ともに底部はヘラ切りされている。小片ではあるが、鎌倉時代のものか。

建物21（No26）（第49図、図版７）

Ｂ11区からＡ11区、そしてＡ12区と延びる長大な掘立柱建物である。柱穴の残存状況がきわめて悪く、建物の全貌がかならずしも明瞭ではない。とくに、東端の張出部分については疑問もある。しかし、地形と柱穴の残存状況から判断して、建物の東半部分については図示した以外の柱穴の存在は考えにくい。建物の規模は６間×２間で、梁間全長390cm、桁行全長1168cm、面積は45.2㎡を測る。東端で北側の梁間１間分が桁行方向に１間突出している。突出部の面積は3.0㎡である。梁間・桁行ともに柱間は一定せず、163～208cmの幅がある。棟の方向はＮ－62°30′－Ｅとなる。柱穴は方形に近い平面形のものもあるが、多くは円形ないしは楕円形である。柱穴の長径は50～72cmと大きく、ほとん



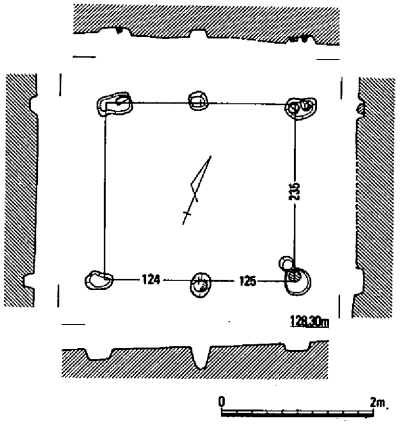
1．暗灰褐色粘質土　　4．白色粘板岩片混灰黄褐色粘質土
2．黒褐色砂質土　　5．黄褐色斑暗灰褐色粘質土
3．暗灰褐色粘性砂質土

第49図　建物21（S＝1/100）

柱穴であるが、四隅は不整形な楕円ないしは方形で長径35～45cm、桁行中央柱穴は円形で長径27・32cmと小さい。南側桁行の柱穴では直径15cmの柱痕跡を確認している。柱穴の埋土は黄褐色斑暗灰褐色粘質土である。

建物23（No３）（第51図、図版７）

Ｂ16区とＢ17区の境界に位置する。２間×１間の掘立柱建物である。平面形は不整形な四辺形を示す。北梁間

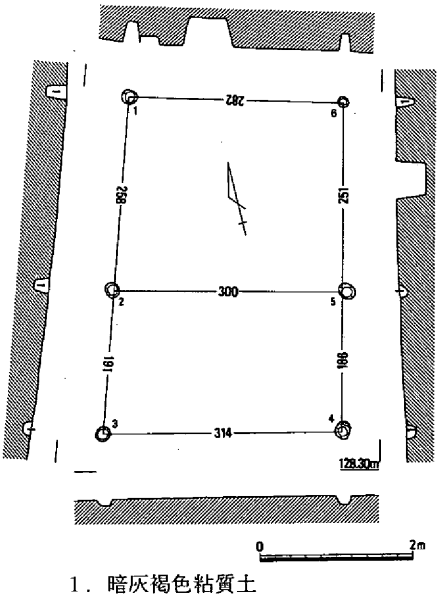


第50図　建物22（S＝1/100）

どの柱穴で直径30cm前後の柱痕跡を確認した。柱穴５は柱痕跡のみかもしれない。柱痕跡には数種の土がみられる。遺物として、柱穴４・６から鉄滓の出土をみている。２区では、建物18と重複して、中世の土器片と鉄滓を出土した柱穴があり、このことから建物21の時代も中世と考えたい。

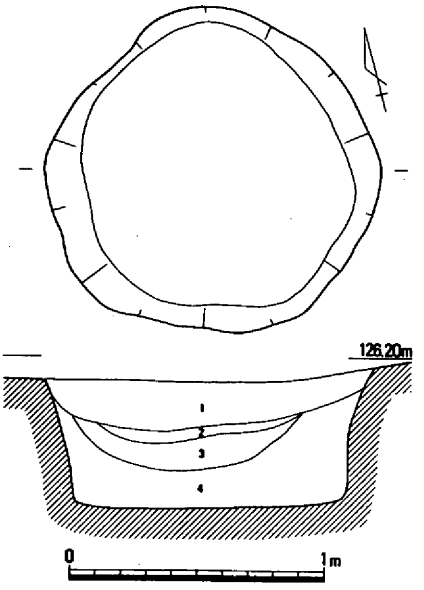
建物22（No５）（第50図、図版７）

Ｂ16区の北東隅にある。２間×１間の掘立柱建物で、梁間235cm、桁行全長249cm、面積5.9m²を測る。桁行の柱間はほぼ等間である。棟の方向はＮ－68°30′－Ｅとなる。



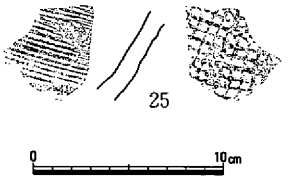
1．暗灰褐色粘質土

第51図　建物23（S＝1/100）



１．灰黄褐色粘質土　３．灰黄褐色粘質土
２．灰褐色粘質土　４．褐灰色粘質土

第52図　土壙６（Ｓ＝１/30）



第53図　土壙６出土土器（Ｓ＝１/４）

282cm、南梁間314cm、東桁行全長437cm、西桁行全長449cm、面積13.2m²を測る。東桁行の方向はＮ－14°－Ｅである。柱穴は円形で長径15～23cmと小さく、柱穴４をみると柱のめり込み部のみの検出かもしれない。

柱穴列３（No67）（図版５）

Ｆ06区からＧ06区にかけて５基の柱穴がＬ字状に配置されているのが検出された。南北列の方向はＮ－83°30′－Ｗとなる。南北列の柱間は265・305cm、東西列の柱間は166cm等間を測る。柱穴は円形で長径23～34cm。

柱穴列４（No64）（図版５）

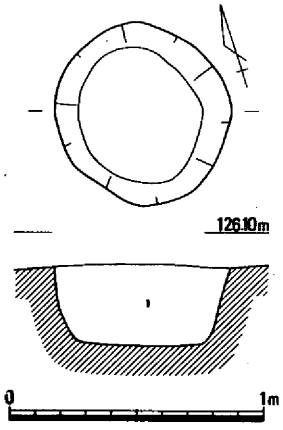
Ｇ07区の中央にある。柱穴３基からなり、柱間は142・176cmである。方向はＮ－12°30′－Ｅを測る。柱穴は円形で長径が22～26cm。

柱穴列５（No63）（図版５）

Ｆ07区にある柱穴３基の列である。方向はＮ－60°30′－Ｅ。柱間は108・118cmを測る。柱穴は円形か隅丸方形で、長径25・27・49cm。

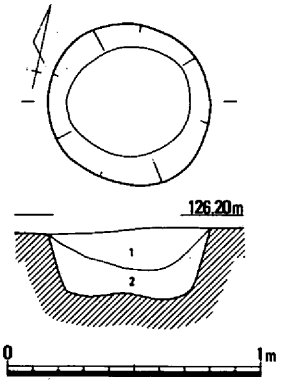
土壙６（No51）（第52・53図）

Ｇ02区とＧ03区の境界にある。平面形は不整形な円形で、長径132cm、深さ57cmを測る。壙壁の傾斜は垂直に近く、底は平坦面となる。埋土は１層と２～４層で大きく２分される。１・３・４層には地山の砕粒が含まれている。出土遺物は図示した須恵器片のみである。勝田焼の甕の胴部片で、鎌倉時代初頭頃であろうか。



１．暗灰褐色粘質土

第54図　土壙７（Ｓ＝１/30）



１．暗灰褐色粘質土
２．黒褐色粘質土斑暗灰褐色粘質土

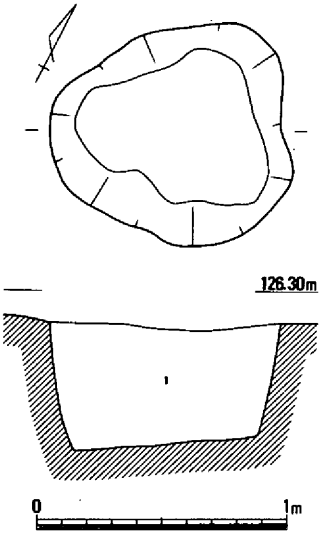
第55図　土壙８（Ｓ＝１/30）

土壙７（No46）（第54図）

Ｊ04区にある。平面形は不整円形で、長径72cm、短径68cm、深さは32cmを測る。壙壁の傾斜は急で、底部は平坦面となる。埋土には灰黄褐色粘質土の小塊や炭粒を含む。遺物はなかった。

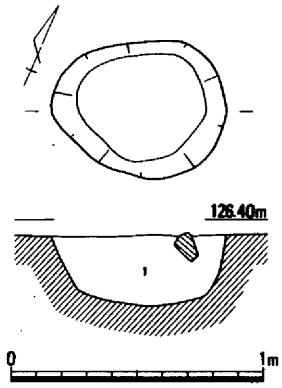
土壙８（No48）（第55図）

Ｉ04区にある。平面形は円形で、長径67cm、深さ29cmを測る。



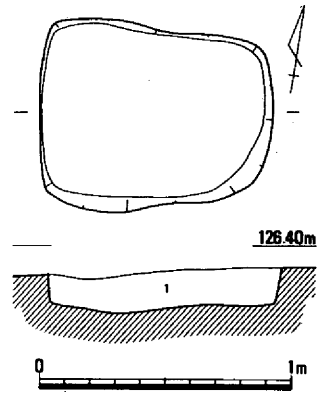
１．暗灰褐色粘質土

第56図　土壙９（Ｓ＝１/30）



1．暗灰褐色粘質土

第57図　土壙10（Ｓ＝１/30）



1．黄褐色粘質土斑暗灰褐色粘質土

第58図　土壙11（Ｓ＝１/30）

須恵器の口縁部の小片があり、古代以降のものと考えられる。

土壙10（No53）（第57図）

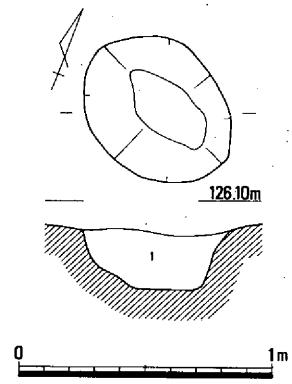
Ｇ03区の南東隅にある。平面形は卵形で、長径70cm、深さ28cmを測る。壙壁の傾斜は急で、底部は凹面をなす。出土遺物はなかった。

土壙11（No52）（第58図）

Ｈ05区の南半に位置する。平面形は長方形に近く、長軸92cm、短軸77cm、深さ18cmを測る。壙壁は垂直に近く、壙壁は急傾斜で、底部には凹凸がある。埋土の上層には炭粒が点々と含まれ、下層はブロック状混合土になっている。遺物には中世らしい土器片がある。

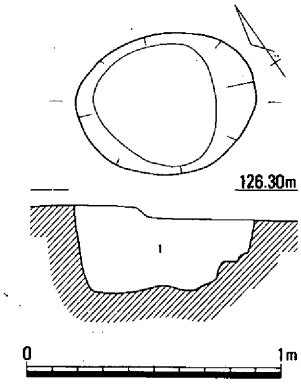
土壙９（No49）（第56図）

Ｈ04区の南東部にある。平面形は不整形な楕円で、長径は102cm、深さ50cmを測る。壙壁は垂直に近く、底部は少し傾斜した平坦面になる。遺物として、



1．暗灰褐色粘質土

第59図　土壙12（Ｓ＝１/30）



1．暗灰褐色粘質土

第60図　土壙13（Ｓ＝１/30）

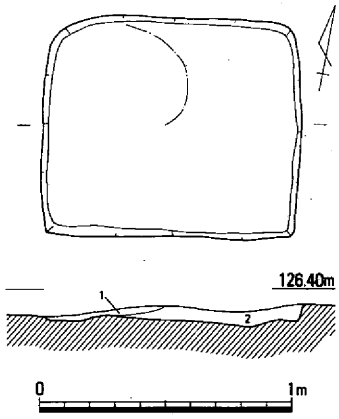
底部はわずかな凹凸はあるものの平坦面となる。埋土はブロック状の混合土となっている。遺物はなかった。

土壙12（No18）（第59図）

Ｃ11区の北西隅にある。平面形は楕円形で、長径68cm、深さ24cmを測る。壙壁の傾斜は急だが変化があり、底部も平坦面が小さい。遺物はなかった。

土壙13（No19）（第60図）

Ｂ10区の北半に位置する。平面形は楕円形で、長径70cm、深さ35cmを測る。壙壁の傾斜は垂直に近いが、地山の礫が露出している。底部は平坦だが凹凸がある。遺物は出土していない。



1．灰黒色粘性砂質土
2．黒褐色粘性砂質土

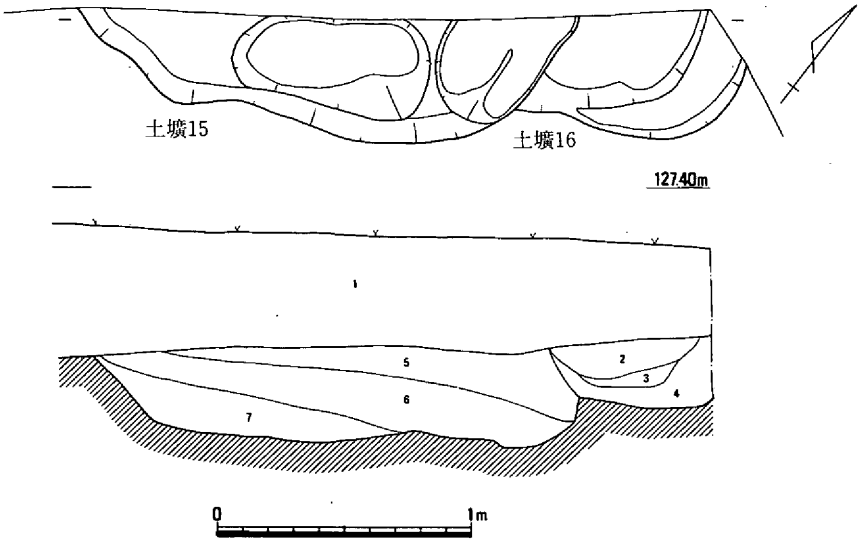
第61図　土壙14（Ｓ＝１/30）

土壙14（No20）（第61図）

Ａ11区の南端にあり、建物21の中央付近に位置する。平面形は方形で、長軸103cm、短軸89cm、深さは９cmを測る。北西隅に直径45cm程度の柱痕跡らしい灰黒色粘性砂質土の塊が認められ、柱穴の可能性もある。遺物はみられなかった。

土壙15（No74）（第62図）

Ａ12区の北西部に位置する。完掘していない。土壙16により破壊を受けている。不整形な円形の土



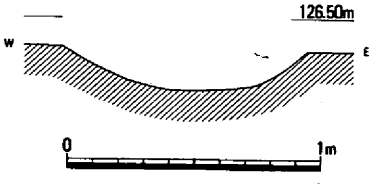
1．淡灰黄褐色粘性砂質土
2．混礫灰褐色粘性砂質土
3．暗灰褐色粘性砂質土
4．灰褐色粘性砂質土
5．暗灰褐色粘性砂質土
6．黄色斑灰褐色粘性砂質土
7．暗灰褐色粘性砂質土

第62図　土壙15・16（S＝1/30）

壙とみられる。深さは38cmである。壙壁の傾斜は一定せず、底部には凹凸がある。埋土の観察によれば、２基の土壙の重複か掘り直しの可能性がある。遺物として、内面に同心円のタタキ目を残す須恵器片がある。

土壙16（No73）（第62図）

土壙15と重複し、土壙15より新しい遺構である。完掘していない。平面形は不整形で、底部は２段になる。深さ33cmを測る。出土遺物はない。



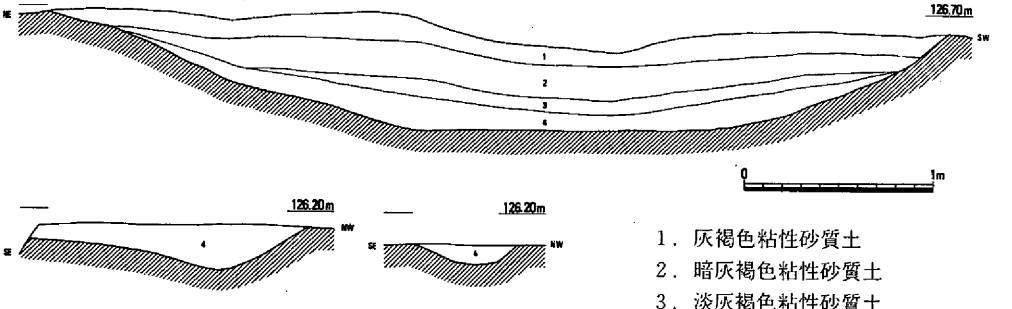
第63図　溝３（S＝1/30）

溝１（No70）（図版５）

Ｇ06区に位置する。直線的に延びる溝である。最大幅33cm、深さは12cm程度と残存状況は悪い。出土遺物はない。

溝２（No71）（図版５）

Ｆ07区からＦ08区にかけて検出された。わずかに弧状を描くように走る。深さは数cmと浅く、残存状況は悪い。最大幅は47cmを測る。出土遺物はみられなかった。



1．灰褐色粘性砂質土
2．暗灰褐色粘性砂質土
3．淡灰褐色粘性砂質土
4．灰褐色粘性砂質土

第64図　溝４（S＝1/40）

溝３（No76）（第63図、図版６）

Ｄ09区で検出された。不整形で、幅が54～115cmとジグザグに変化する。深さは20cmである。遺物は出土していない。検出が困難であったため、より古い時代の遺構であるかもしれない。

溝４（No10）（第64図、図版６）

Ｃ10区、Ｃ11区、Ｂ11区とほぼ直線的に延びる。谷部の黒ボク層を掘り込んで作られていたが、表土剥ぎで黒ボク層を除去したため、検出部分は底部付近のみとなってしまった。検出部分で幅32～134cm、深さ24cmを測るが、第64図上段の調査区の側壁の断面観察によれば、深さは60cm前後あったことが判る。遺物に中世の土器片が出土している。建物21の棟方向と平行するようで注意される。

第６節　近世以降の遺構・遺物

近世以降の遺構は１区から３区までの全域で確認されている。１区と３区の遺構は主に農耕地に伴うもので、近代以降のごく新しい遺構とみられ、２区の中央部から東半にかけては、江戸時代の屋敷地と墓地が検出された。２区の中央付近に石積みの溝があり、その西に接して８基の墓穴が密集していた。墓穴は鉤の手に並んでいるようで、おそらくは方形の墓地があったものとみられる。小さな１基の墓穴を除き、いずれの墓穴からも18世紀後半の煙管[1]が出土している。ある一時期の一家の墓地と考えられる。２区の東端部分では不整形な土壙が４基あり、底面も凹凸が激しく、あるいは立木跡ではないかと思わせる。この部分を庭と考え、これと石積みの溝との間に礎石建ちの屋敷を想定したい。礎石は当然に後世の削平を受けて消失している。２区の最東端の土壙25は桶状のものを据えていて、あるいは手水跡ではないかとみられる。このように、江戸時代の中期には１軒の屋敷が墓地を伴って存在していたと考えられるが、その存続期間は短く、その後は農耕地として開墾されて現代に至ったものと思われる。

土壙17（No55）（第66・67図、図版12）

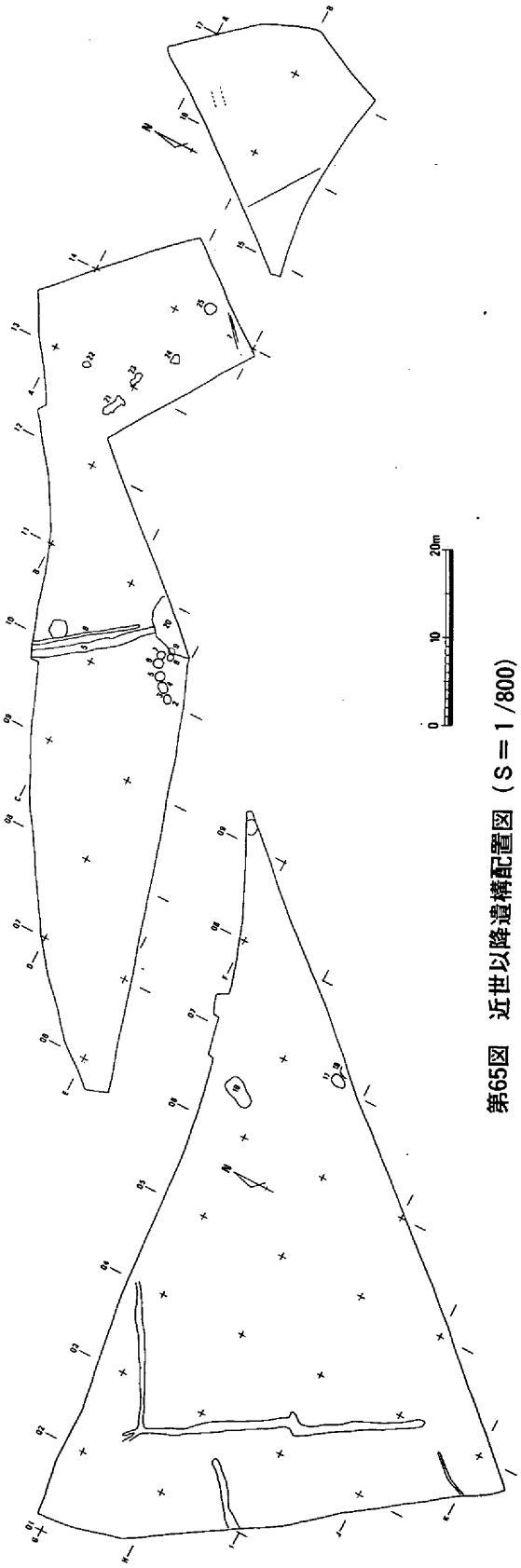
Ｇ07区の南西隅で検出した。平面形は卵形で、長径153cm、短径124cm、深さ21cmを測る。壙壁の傾斜は緩く、底部は皿状を呈する。図示した遺物は磁器椀と備前焼の灯明皿である。椀の文様は薄墨色を発する。

土壙18（No56）

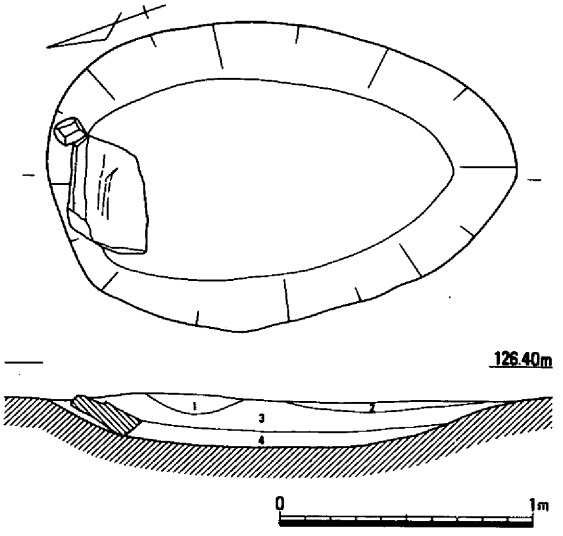
大形の方形土壙の角を検出したにすぎない。土壙17の南に近接し、大部分は調査区外にある。検出部分で長辺110cm、深さ８cmを測る。埋土は灰褐色粘質土である。

土壙19（No61）（図版８）

Ｆ06区にある。長楕円形と隅丸方形の二つ

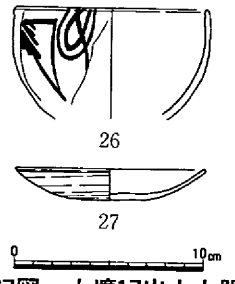


第65図　近世以降遺構配置図（Ｓ＝１/800）



１．黄褐色粘土斑暗灰褐色粘質土　３．灰褐色粘質土
２．暗灰褐色粘質土　４．褐灰色粘質土

第66図　土壙17（S＝1/30）



第67図　土壙17出土土器（S＝1/4）

の土壙が重複している。長楕円形土壙は長径268cm、短径154cm、深さ63cmを測り、底部は８の字状に円が連続している。方形土壙は楕円土壙より古く、長軸195cm、深さ45cmを測る。ともに壙壁の傾斜は垂直に近く、底部は平坦面となる。その規模・形状・位置から判断して、畑の肥料貯蔵穴であろう。近代に降るか。

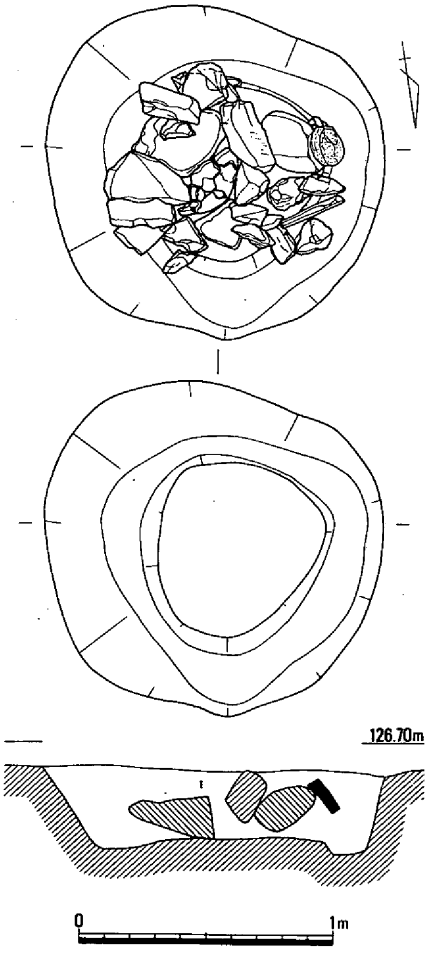
土壙20（No６）（図版８）

Ｃ10区の南東部を占める大形の土壙である。検出部分で長径750cm、深さ54cmを測る。壙壁の傾斜は緩く、底部は広い平坦面となっている。土壙のなかほどに集石が認められたが、炭や焼土を多く含んだ薄層にのっていて、土層観察から別の遺構に伴うと判断した。土壙20は溝５との関係が明瞭ではないが、同時存在とすれば、池のような施設が考えられる。出土遺物に備前焼の灯明皿がある。

土壙21・23・24（No21・23・24）

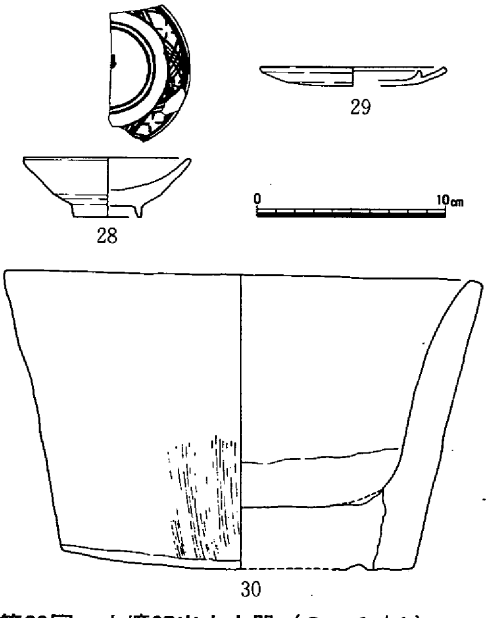
Ａ12区からＢ13区にかけて３基の土壙が並んで検出された。いずれも不整形で浅く、底部は凹凸している。埋土は黒ボクに似た土であった。立木の株穴ではないかと思っている。出土遺物はない。

土壙22（No22）



１．黒褐色粘性砂質土

第68図　土壙25（S＝1/30）



第69図　土壙25出土土器（S＝1/4）

Ａ12区にある。土壙21・23などと同じく地山の砂礫土部分に掘られているが、壙壁の傾斜は急で、底部もほぼ平坦である。不整形な方形で、長軸87cm、短軸70cm、深さ38cmを測る。出土遺物はない。

土壙25（No25）（第68・69図、図版９・12）

Ｂ14区に位置する。不整形な円形で、長径139cm、短径135cm、深さ43cmを測る。壙壁の傾斜は西側が緩く、東側は垂直に近い。底部は平坦面となっているが、周縁に幅９～20cm、深さ５cmの溝が巡っている。壙内では多くの礫が密集して出土した。礫は長径15～40cmで、角礫が多かった。検出状況から推測すると、底面の溝は直径80～90cmの桶のような物を埋置した痕跡とみられ、この桶の中に礫を詰め込んでいたのではないかと考えられる。おそらく手水の水を受ける施設であろう。図示した遺物のうち、28は磁器の小鉢で、内面は白色、外面は明緑灰色を呈する。内面の文様は灰青色に発色している。[2] 29は瓦質の灯明皿で、内面の環状突起に煤が付着している。30は瓦質の火鉢と思われる。底部と体部の接合面にはカキ目状の傷をつけ、外面の下半には工具でなでたような痕跡を残す。

溝５（No８）（図版９）

Ｂ09区、Ｂ10区、Ｃ10区とほぼ直線的に延びる石組の溝である。溝の掘り方は幅90～105cm、深さは31cmである。両側の石積は大部分が１段だけの残存であったが、下流にあたる北側の調査区端では２段が残り、その高さは35cmあった。石積には小石による裏込めが粗くなされていた。両側の石積の距離は30～35cmを測る。この溝は土壙20と接しているが、接触部から５ｍの間には石積はみられなかった。出土遺物に備前焼の灯明皿がある。

溝６（No９）（図版９）

溝５と平行する直線的な素掘りの溝である。溝５との距離は60～80cmにすぎない。幅40cm、深さ38cmを測る。底部は北に向かって低くなり、溝５と同じ傾斜をもっている。

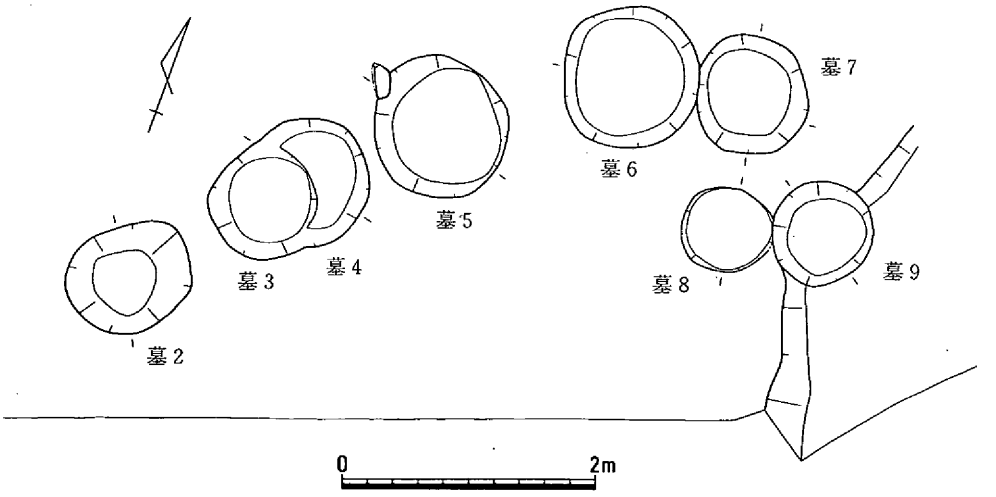
溝７（No75）

Ｂ14区の南西部にある。直線的な素掘りの溝で、幅24cm、深さ12cmを測る。わずか４ｍほどの検出にすぎないが、溝５・６と走行が直行するようで、方形の区画を形成しているかもしれない。

墓地（第70図、図版６）

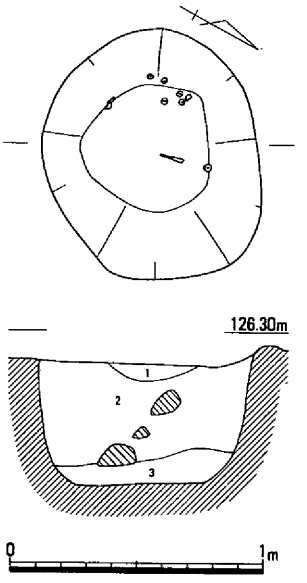
Ｃ10区の南半で近世墓が８基群集しているのが検出された。鉤形に並ぶようで、墓地として区画されていたのではないかと考えられる。調査区南壁にも墓が露出していることから、墓地はさらに南に延びている。

８基のうち、墓８は小さくて浅く、他のすべての墓で出土した煙管がみられないことから、子供の墓と考えられる。他の７基の墓では、鋏をもつもの



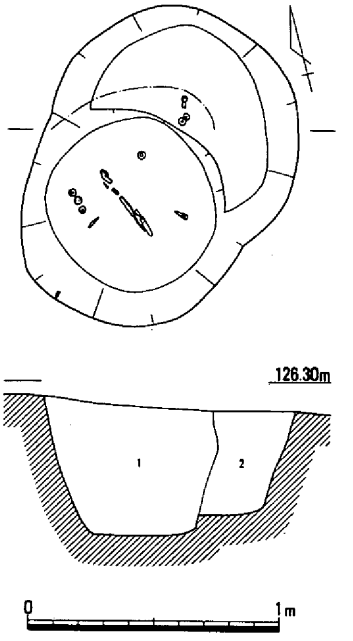
第70図　近世墓配置図（Ｓ＝１/60）

とないものがあり、もつものが墓３・６・９とあって、墓８が墓９に接していることをみると、女性の墓ではないかと思われる。墓の配置をみると、墓２・３、墓４・５、墓６・７がそれぞれ対をなすようで、墓６・７からは共に椀が出土するなど、鋏のことも考え合わせ、夫婦の墓が連続しているとみられる。



１．灰褐色粘質土
２．混礫暗灰褐色粘質土斑
　　灰黄褐色粘質土
３．灰褐色粘質土

第71図　墓２（S＝１/30）



１．砂礫混じり灰褐色粘質土
２．暗灰褐色粘質土

第72図　墓３（左）・４（S＝１/30）

墓２（No17）（第71図、図版10・13）

墓壙は楕円形で、長径100cm、深さ57cmを測る。釘がかなり出土し、木棺の使用は確実である。底面の中央に煙管の吸い口、西隅に銭貨の集合がみられる。出土遺物は、煙管吸い口１本、銭貨13枚、釘10本である。銭貨は銅銭７枚と鉄銭６枚で、銅銭はすべて新「寛永通寶」であった。

墓３（No16）（第72図、図版10・13・14）

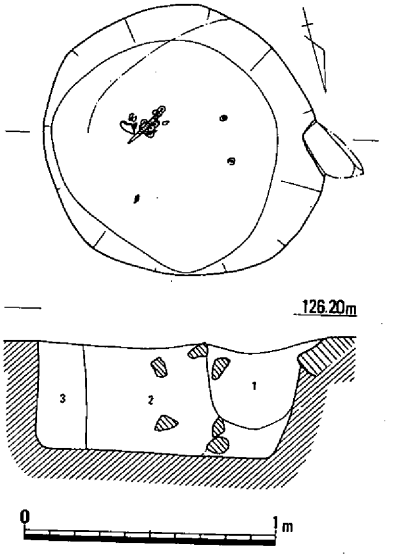
重複した墓壙の新しい方である。楕円形で、長径98cm、深さ56cmを測る。多数の釘が出土し木棺の使用が考えられる。底面の中央から煙管と鋏が出土し、西寄りに銭貨が並んで置かれていた。出土遺物は、煙管１本、煙管吸い口１個、鋏１丁、銭貨８枚、釘30本である。銭貨は銅銭６枚と鉄銭２枚で、銅銭には北宋銭の「元祐通寶」１枚と「寛永通寶」５枚があり、文字が明瞭なもの３枚は新「寛永」である。

墓４（No16）（第72図、図版10・13・14）

墓３によって半分を破壊されている。円形の墓壙で、長径102cm、深さ42cmを測る。木棺墓と考えられる。底面の中央から煙管の雁首と銭貨３枚が出土し、この墓に副葬されたと推測される煙管の吸い口が墓３の墓壙の西肩口で検出された。出土遺物は、煙管雁首１個、銭貨３枚、釘４本である。銭貨はいずれも銅銭で、文字の明瞭な２枚は新「寛永通寶」である。

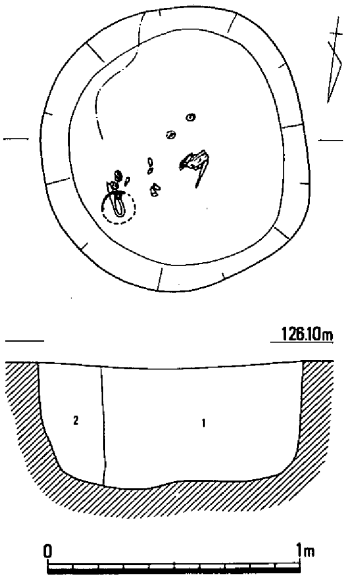
墓５（No15）（第73図、図版10・14）

ほぼ円形の墓壙で、長径115cm、深さ49cmを測る。検出面で方形に近い木棺痕跡が認められた。底面の中央南寄りで、遺物が集合して出土した。煙草道具と銭貨が重なり合っていた。出土遺物は、煙管１本、火打ち金１個、煙草入れのもの



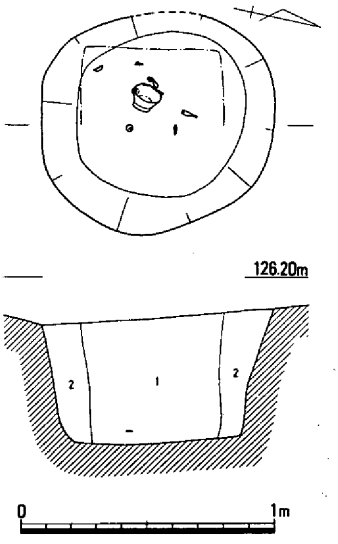
１．灰黄褐色粘質土（小礫多）
２．灰褐色粘質土
３．暗灰褐色粘質土

第73図　墓５（S＝１/30）



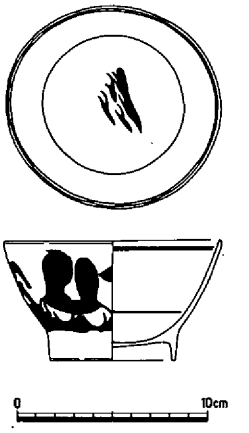
1．暗灰褐色粘質土斑黄褐色粘質土
2．黄褐色粘質土斑暗灰褐色粘質土

第74図　墓６（Ｓ＝１/30）



1．黄褐色粘質土斑暗灰褐色粘質土
2．暗灰褐色粘質土斑黄褐色粘質土

第75図　墓７（Ｓ＝１/30）



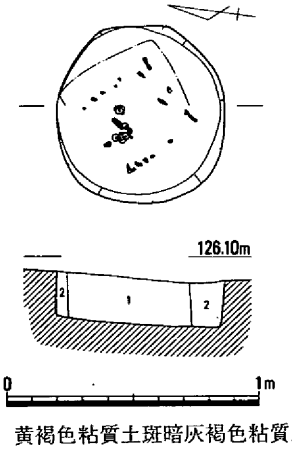
第76図　墓７出土磁器（Ｓ＝１/４）

と思われる留金具・飾り金具各１個、銭貨29枚、釘20本で、この墓地のなかではもっとも多くの遺物を副葬していた。銭貨には布の付着したものがあり、巾着に入っていた可能性がある。煙管は検出時に植物の皮のようなものが巻かれ、その上に黒漆が塗布されていたようであった。銭貨は銅銭16枚、鉄銭13枚である。銅銭は判読不能な４枚を除きすべて「寛永通寶」であったが、古「寛永」３枚に対し新「寛永」は９枚含まれていた。

墓６（No14）（第74図、図版10・14・15）

墓壙はほぼ円形で、長径112cm、深さ51cmを測る。検出面で方形の木棺痕跡らしい線が確認された。底面の中央で煙管、北東の隅で椀・鋏・銭貨が出土した。椀は漆塗りの木製品とみられ、赤色と黒色の漆の皮膜が残存していた。出土遺物は、木製椀１個、煙管１本、鋏１丁、銭貨12枚、釘９本である。銭貨には布の付着したものがみられた。銭貨は銅銭５枚と鉄銭７枚である。銅銭はすべて「寛永通寶」であったが、古「寛永」が１枚認められた。

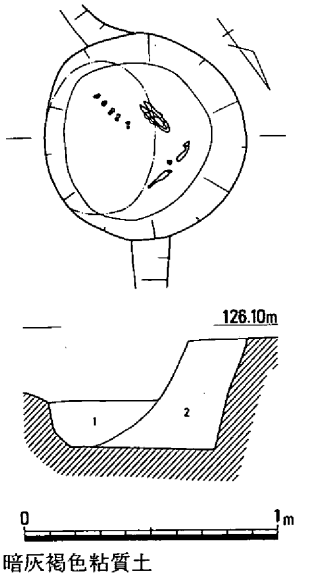
墓７（No13）（第75・76図、図版10・16）



1．黄褐色粘質土斑暗灰褐色粘質土
2．１より黄褐色斑多く淡色

第77図　墓８（Ｓ＝１/30）

不整形な円形の墓壙で、長径96cm、深さ55cmを測る。検出面で明瞭な方形の木棺痕跡を確認し、その一辺は53cmであった。底面の中央から磁器椀と煙管と銭貨が出土した。出土遺物は、磁器椀１個、煙管１本、銭貨４枚、釘９本である。磁器椀は灰青色の染付で、外面に海浜風景を描き、見込みには鳥が群れて飛ぶ様を意匠しているようである。銭貨は銅銭２枚と鉄銭２枚である。銅銭は判読可能な１枚が新「寛永通寶」で、鉄銭



1．暗灰褐色粘質土
2．暗灰褐色粘質土斑灰黄褐色粘質土

第78図　墓９（Ｓ＝１/30）

の１枚でも「永」の字が明瞭に判読できた。

墓８（No12）（第77図、図版10・15）

墓壙は円形で、長径73cm、深さ22cmを測る。検出面で方形の木棺痕跡を確認した。その一辺は42cmである。底面の中央部西寄りで銭貨の集中出土がみられた。また、木棺痕跡の辺と平行するような形で、釘の列が二辺認められた。釘は先を上に向けていたことから棺の底板を打ちつけたものであり、このことからも木棺が方形であったことが知られる。出土遺物は、銭貨22枚、釘58本である。銭貨には布の付着したものがあった。銭貨は銅銭17枚と鉄銭５枚で、銅銭の占める割合が高い。銅銭は、判読不能な２枚を除き、すべて新「寛永通寶」である。また、鉄銭の１枚も「寛永通寶」と判読することができた。

墓９（No11）（第78図、図版10・16）

土壙20によって上部を破壊されている。墓壙は円形で、長径81cm、深さ43cmを測る。底面から釘が直線的に並んで出土したため、木棺はやはり方形と考えざるをえない。底面から直角をなすような形で煙管と鋏が出土した。出土遺物は、煙管１本、鋏１丁、釘13本で、銭貨が出土しなかったことは注目される。

注

（１）古泉弘『江戸を掘る』柏書房　1983年

（２）佐賀県立九州陶磁文化館常設展示、有田・広瀬向窯出土染付青磁碗蓋（18世紀後半）に酷似

付載　大田茶屋遺跡出土の赤色顔料について

福岡市埋蔵文化財センター　本田　光子
宮内庁正倉院事務所　成瀬　正和

はじめに　大田茶屋遺跡の配石土壙墓（墓１）出土の赤色物について、その材質と状態を知るために顕微鏡による観察およびＸ線分析を行った。墳墓出土例や土器・木器等の彩色例に関する現在までの知見に寄れば、出土赤色物は鉱物質の顔料であり、酸化第２鉄Fe_2O_3を主成分とするベンガラと、赤色硫化水銀HgSを主成分とする朱の２種が用いられている。これ以外に古代の赤色顔料としては、四三酸化鉛を主成分とする鉛丹があるが、出土例はまだ確認されていない。ここでは、これら三種類の赤色顔料を考えて調査を行った。

試料　赤色顔料の出土状況は第32図のようであり、提供を受けた資料は「赤味を帯びた土」である。これを実体顕微鏡下で観察すると、明るくしかも濃い赤色をした朱のように見える赤色物が土状の骨の組織の中に面状、層状に付着したり入り込んだりしたものと、径約１～２mmの赤色物の凝集した小塊および土からなっていた。この「赤味を帯びた土」は遺骸が腐朽したものでいわゆる骨粉状であり、赤色物の層や小塊との明確な分離は無理であったが、出来る限り調整（混入土砂、骨片等夾雑物の除去）し、針先に付く程度を検鏡用に、残りをＸ線分析に供した。

顕微鏡観察　光学顕微鏡により透過光・落射光40～400倍で検鏡した。検鏡の目的は、赤色顔料の有無・状態・種類を判断するものである。古代の三種の赤色顔料（朱、ベンガラ、鉛丹）は特に微粒

の物が混在していなければ、粒子の形状、色調等の違いから検鏡により見極めがつく。

今回の試料には、赤色顔料としては朱粒子だけが認められ、ベンガラ粒子は認められなかった。粒子径は最大で約20μmで、10μm以上の粒子も含まれるが、約0.5～5μm前後が大半を占める。

蛍光X線分析　赤色顔料の主成分元素の検出を目的として実施したものである。理学電機工業㈱製蛍光X線分析装置を用い、X線管球；クロム対陰極、印加電流；20mA、分光結晶；フッ化リチウム、検出器；シンチレーション計数管、ゴニオメーター走査範囲（2θ）；10～65°、走査速度；2θ8°／分、時定数；0.5秒の条件で測定を行った。赤色顔料の主成分元素としては水銀と鉄が検出された。水銀のX線強度は鉄のそれに比べて著しく大きかった。この他、マンガン、ストロンチウム、ルビジウムなどの元素が検出されたが、これらはみな主として混入の土砂に由来するものと考えられる。ただし、鉄は土砂部分にも必ず含まれるので、赤色顔料由来のものとの区別は蛍光X線強度から判断した。

X線回折　赤色の由来となる鉱物成分の検出を目的として、理学電機㈱製文化財測定用X線回折装置を用い、X線管球；クロム対陰極、フィルター；バナジウム、印加電圧；25kV、印加電流；10mA、検出器；シンチレーション計数管、発散および受光側スリット；0.34°、照射野制限マスク（通路幅）；4㎜、ゴニオメーター走査範囲（2θ）；30～66°、走査速度；2θ4°／分、時定数；2秒の条件で測定を行った。赤色の由来となる鉱物として、辰砂（Cinnabar赤色硫化水銀）が同定された。赤鉄鉱（Hematite酸化第二鉄）のピークは認められなかった。この他、石英、長石などが確認されたが、それは主として混入土砂に由来するものと考えられる。

まとめ　検鏡結果で朱、蛍光X線分析で水銀、X線回折で辰砂が確認されたので、本試料は朱（赤色硫化水銀）である。最多頻度径は小さいが粒子径範囲がやや大きいので均一性に欠ける。

筆者等は北部九州地方の弥生時代から古墳時代の墳墓出土赤色顔料について数百例の調査を行ってきたが、その傾向を簡単にまとめると次のようになる。

甕棺墓内出土赤色顔料は当初から朱が主流であり、甕棺墓の衰退する後期前半からは墳墓での朱の使用料が急激に減少する。その頃山陽・山陰地方では墳墓での朱の使用量が増えるように見受けられる。また、北部九州では朱は時期によりその粒度が異なる可能性があると思われる。今までの調査例は少数であり、おおまかな傾向としてしか捉えられないが、大きく2つのタイプにはわかれる。前漢鏡を伴う甕棺墓から出土する朱はその細かさ・均一性において傑出しているようであり、それ以前、以降の甕棺墓出土朱はそれに比べて粒度が大きい。

当地方の墳墓出土赤色顔料を実見するのは2例目であるが、他の1例は楯築遺跡出土朱であり、その粒度は北部九州地方で後漢鏡と共伴する朱のそれに近い。本試料の粒度は楯築遺跡出土のそれとはまったく異なる。比較的細かいが、10μm以上の粒子が含まれるので粒径範囲と均一性の点で、上記の傑出した朱とは異なるが、この配石土壙墓の時期を考える上では興味深い事実ではないだろうか。筆者の一人本田は出土朱の分類には粒度の差に表れる事実が考古学的には有効であると考え、現在、試料調整や測定方法等を実験している段階であり、出土状況、時期、試料採取状況の明確な試料を増やし検討を重ねたい。当地方出土の朱の粒度についての調査例に期待したい。

今回調査の機会を頂きました岡山県古代吉備文化財センター平井勝氏、岡本寛久氏に感謝致します。

報告書抄録

ふりがな	おおだ ちゃや いせき いち
書名	大田茶屋遺跡１
副書名	県道津山加茂線建設に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	９６
編著者名	岡本寛久・本田光子・成瀬正和
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所在地	〒７０１－０１　岡山県岡山市西花尻１３２５－３　TEL 086-293-3211
発行機関	岡山県教育委員会
所在地	〒７００　岡山県岡山市内山下２－４－６　TEL 086-224-2111
発行年月日	西暦　１９９４年１１月３０日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
大田茶屋遺跡（おおだ ちゃや いせき）	岡山県津山市大田（おかやまけん つやまし おおだ）	33203		35度 5分 22秒	134度 0分 14秒	19930501 ～ 19931206	3557	県道津山加茂線建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大田茶屋	集落跡 墓地	縄文時代 晩期	土壙　3基	縄文土器，石鍬，石鏃	谷尻式期・沢田式期の２時期あり
		弥生時代 中期～後期	竪穴住居　3軒 掘立柱建物　8棟 土壙　2基 配石土壙墓　1基	弥生土器，石鏃	住居より建物が多い １間×１間の細長い建物が主体
		古代 （奈良時代？）	柱穴列　2列	なし	掘立柱建物から礎石建物に変えたか
		中世 （鎌倉時代？）	掘立柱建物　15棟 柱穴列　3列 土壙　11基 溝　4条	土師器，須恵器，鉄釘	住居と考えられる建物は４棟
		江戸時代	木棺墓　8基 溝　3条 池？　1基 土壙　3基	土師器，陶器，磁器，鉄釘，煙管，銭貨（寛永通寶，元祐通寶），鋏	木棺は方形の箱型18世紀後半か 鋏は女性に伴うか 屋敷と墓が隣接していたか

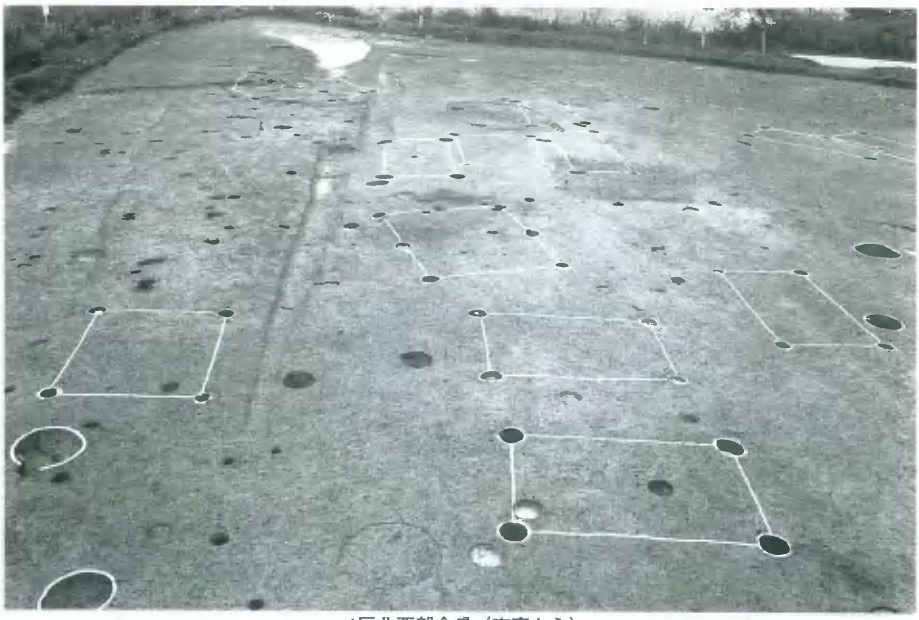
土壙2（北西から）

土壙2完掘後（南東から）

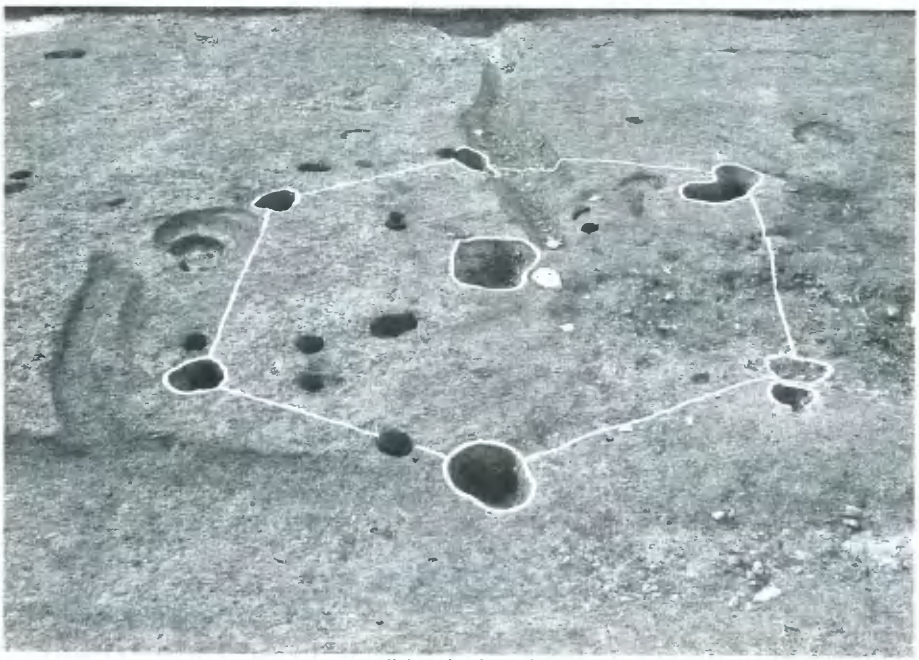
土壙3完掘後（北から）

土壙3（北から）

図版2

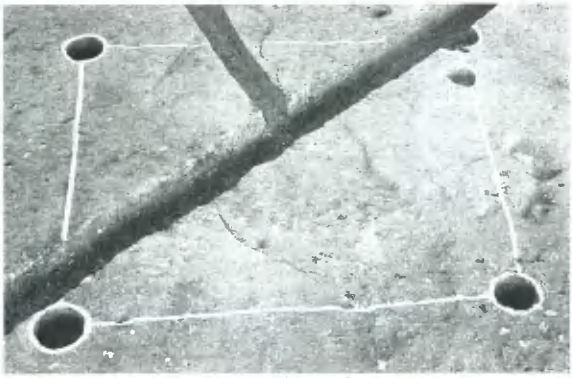


1区北西部全景（南東から）

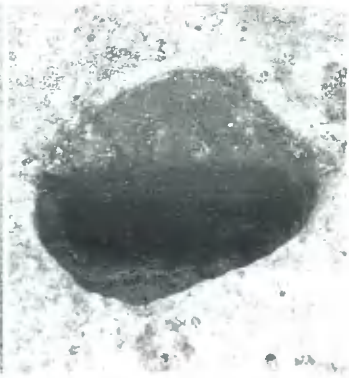


住居1（北東から）

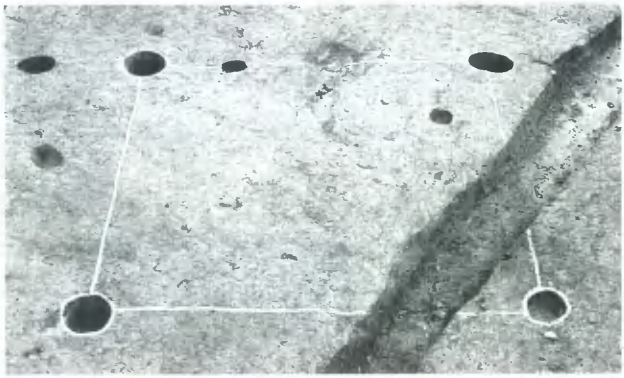
3区全景（東から）



住居2（西から）



住居2北西柱穴（西から）

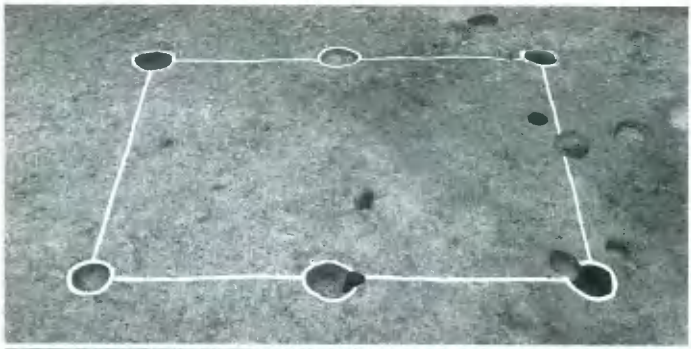


住居3（西から）

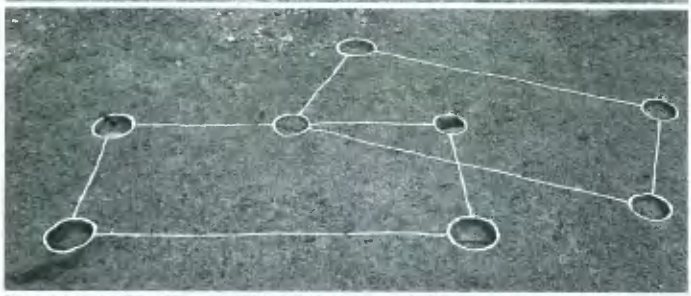
住居3北西柱穴（西から）

図版4

1区北西部　住居1・建物2～5（北東から）



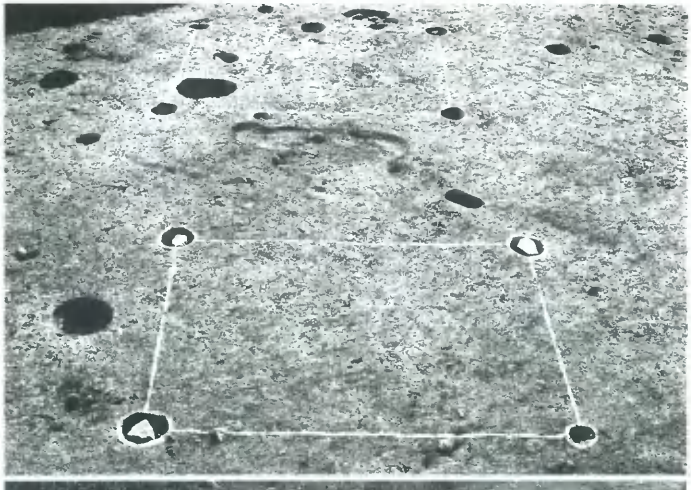
建物1（北東から）



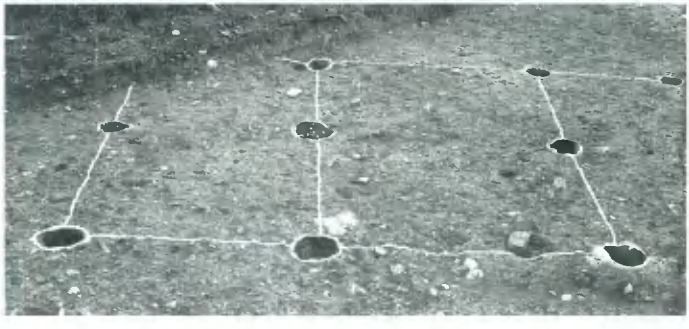
建物6・7（南から）

墓1（南西から）

1区全景（東から）



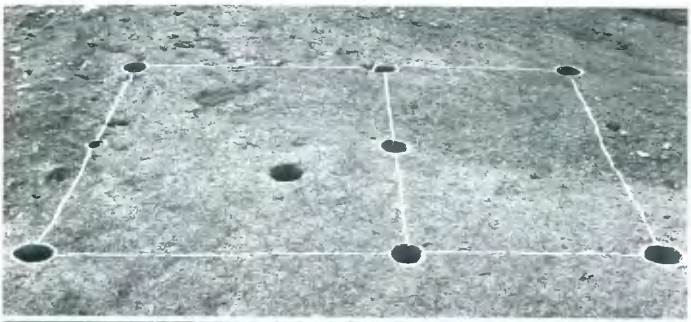
建物15・16（北から）



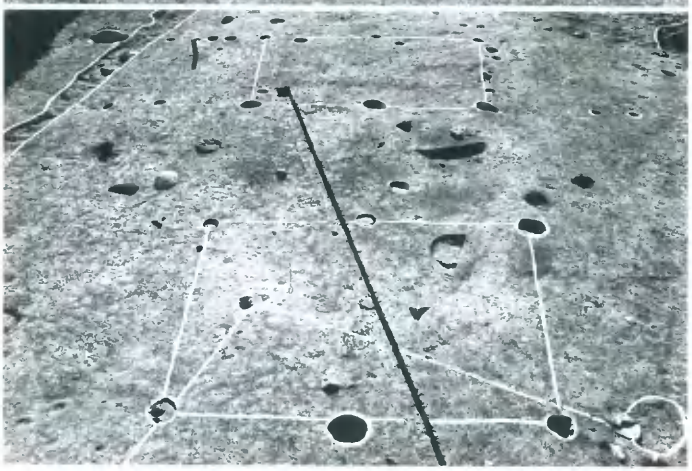
建物17（南西から）

図版6

2区西半部全景（東から）

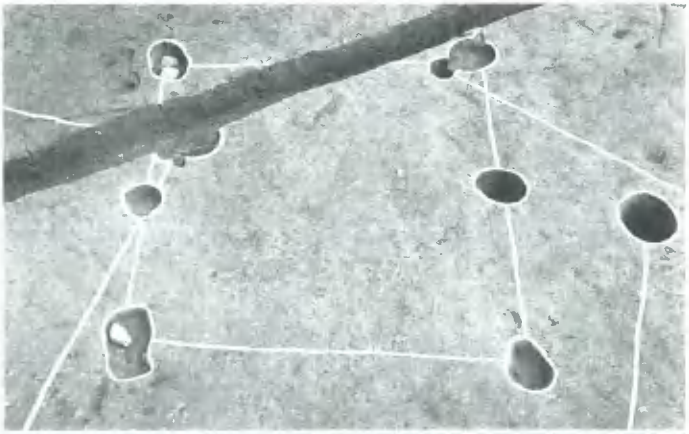


建物18（南東から）

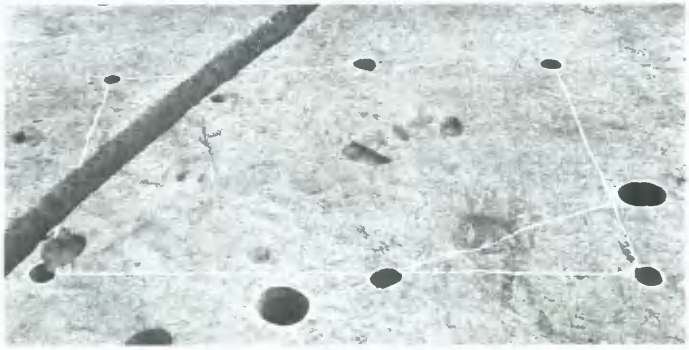


建物20（北東から）

建物21（北東から）



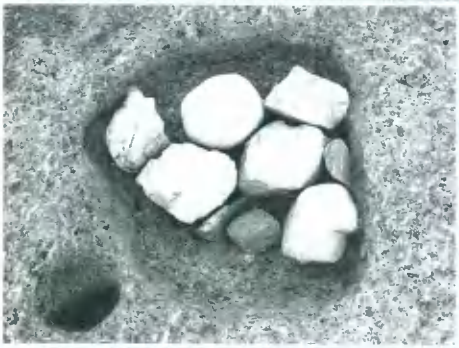
建物22（西から）

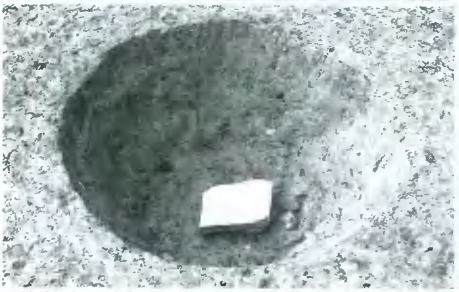


建物23（西から）

図版8

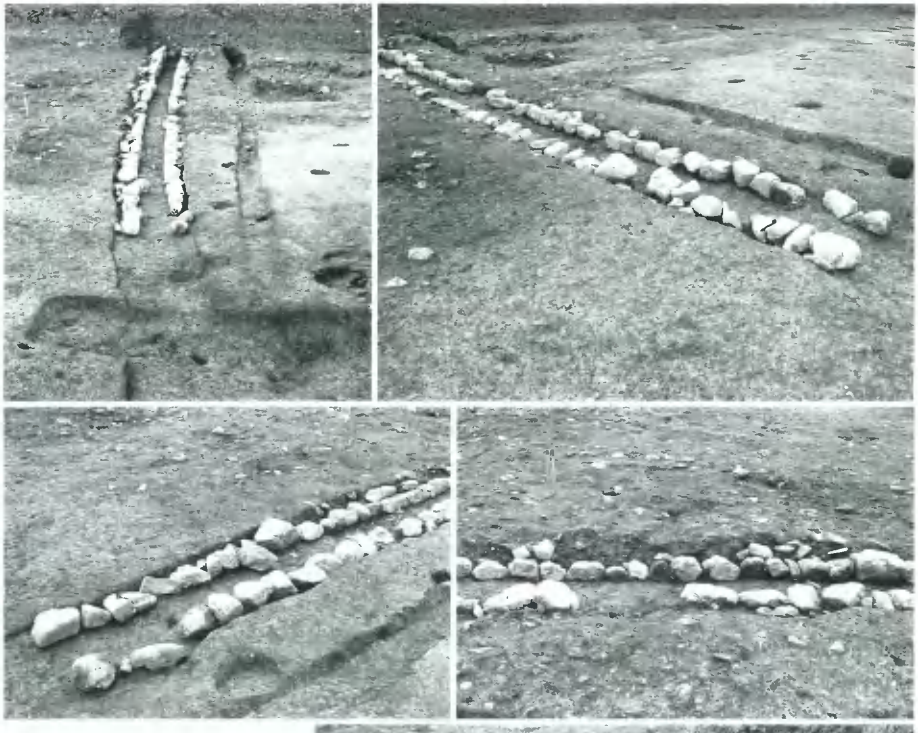
柱穴列1・2、土壙19
（南東から）





柱穴列1　南柱穴（左上）（右上）・中柱穴（左下）・北柱穴（右下）
（南西・南東から）　（西から）　（北から）

土壙20（北西から）



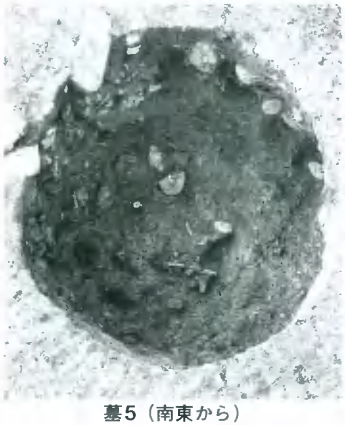
溝5・6
（左上）全景（南東から）
（右上）石積全景（南から）
（中右）石積南半（東から）
（中左）西側石積側面（北東から）
（下）石積北半（北東から）

土壙25（北から）

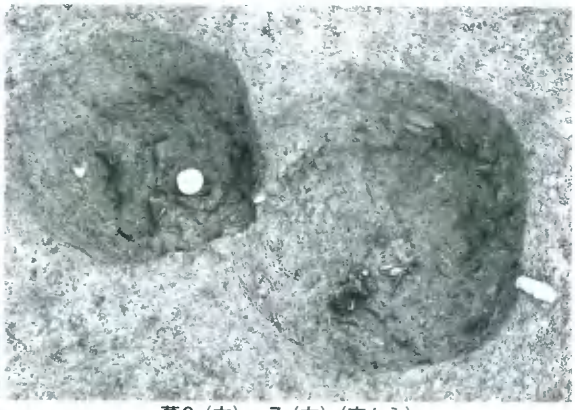
図版10

墓2（北東から）

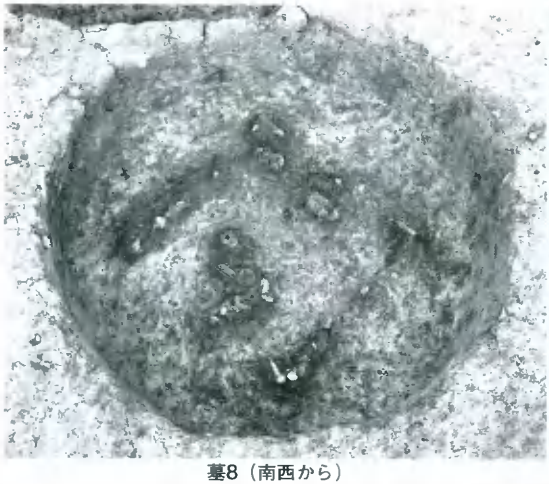
墓3・4（北西から）



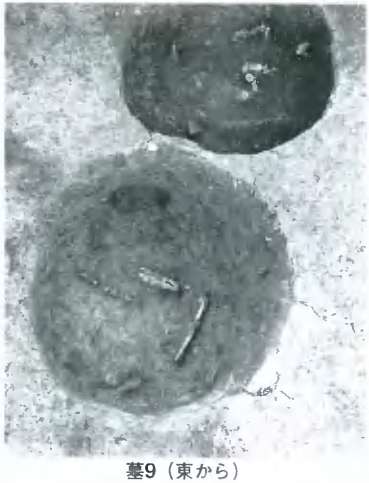
墓5（南東から）



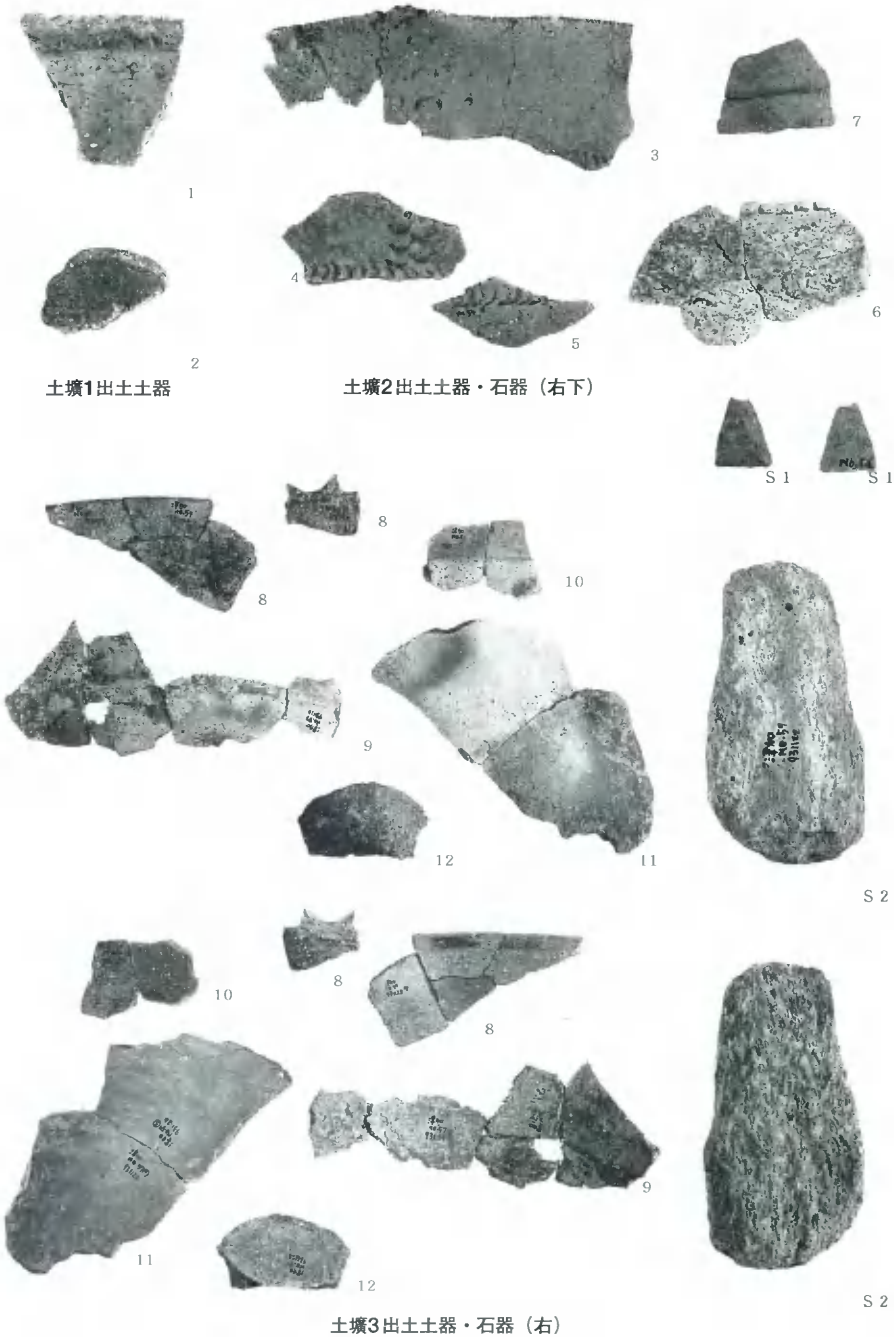
墓6（右）・7（左）（南から）



墓8（南西から）



墓9（東から）



土壙1出土土器　　土壙2出土土器・石器（右下）

土壙3出土土器・石器（右）

図版12

S 3

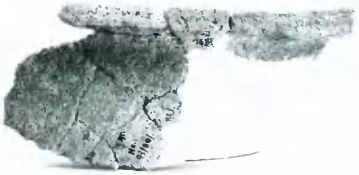
S 4

S 3

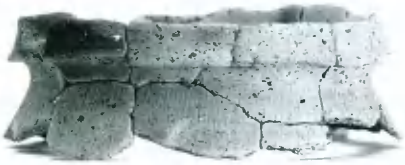
S 4

土壙3出土石器

14


15

16


19

住居2（１４・１５）・住居3（１６）・１区柱穴（１９）出土土器

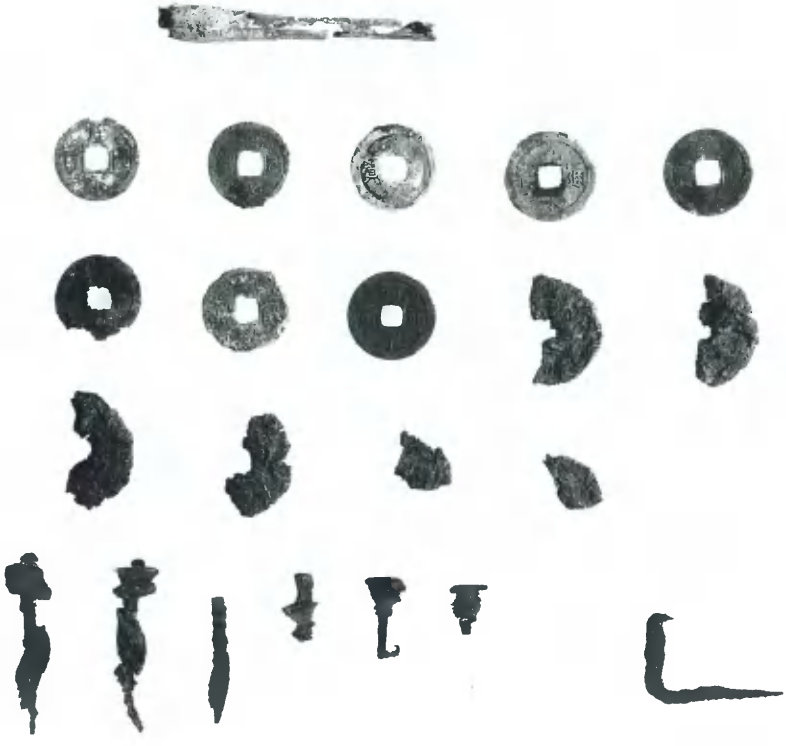
28

30

29

27

土壙25（２８～３０）・土壙17（２７）出土土器



墓2出土遺物　　建物17出土釘

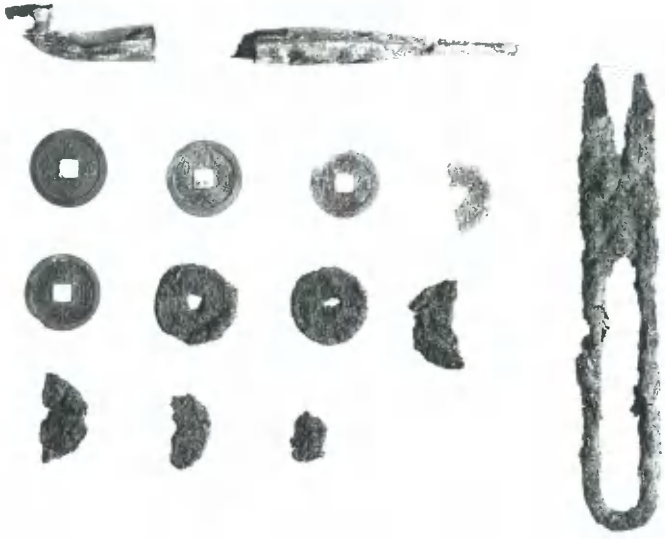
墓3（下・右）・墓4（上）出土遺物

図版14

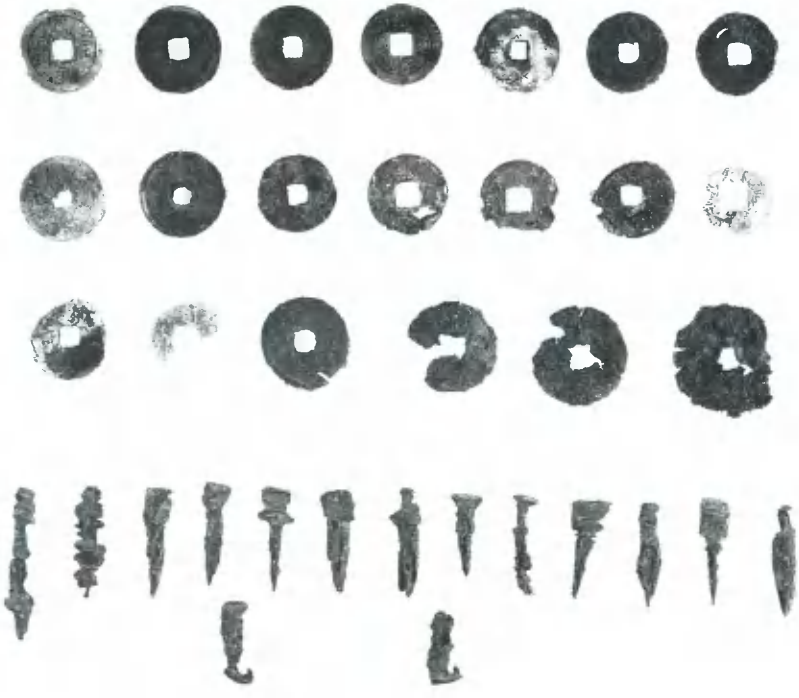
墓3・4出土釘

墓5出土遺物

墓6出土釘



墓6出土遺物



墓8出土遺物

図版16

墓7出土遺物

墓7出土釘

墓9出土釘

31

31

31

墓9出土遺物（左上）・墓7出土磁器（３１）

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告96

大田茶屋遺跡　1

県道津山加茂線
建設に伴う発掘調査

平成6年11月20日　印刷
平成6年11月30日　発行

編　集　岡山県古代吉備文化財センター
発　行　岡山県教育委員会
印　刷　サンコー印刷株式会社